HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	健康概念の起源について ： 古代ギリシャ世界における身体と生命
Author(s)	河口, 明人
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 111, 163-196
Issue Date	2010-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.111.163
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44656
Type	departmental bulletin paper
File Information	09Kawaguchi.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究院
紀要　第 111 号　2010 年 12 月

健康概念の起源について

― 古代ギリシャ世界における身体と生命 ―

II　生命のアイデンティティ

河　口　明　人*

Origin of Health Concept

Soma and Psyche in Ancient Greece

Akito KAWAGUCHI

【要旨】ポリスの存続という至上命題の中で，古代ギリシャ人が人間の身体に抱いていた観念は，精神と乖離した二元論的な理解ではなく，彼らの生存の内的欲求を意義づけるエートス（ethos）と一体のものであった。貴族文化の余韻をとどめながらも，人間の内面は身体に表現されることを確信し，その身体を創造せんとする卓越性（アレテー）の概念と結びつき，戦士共同体における生命のアイデンティティを構成することによって，ギリシャ文化や文明をもたらした主要な源泉となった。死すべき運命を悼みながら，その反映としての不滅の栄光を保障する卓越した勇気の顕現を，ポリス間の絶えざる戦闘という不幸の中で具現しようとしたギリシャ人は，英雄精神によって不死の神に至らんとする飽くなき憧憬を抱き続け，鍛錬された身体的能力と，限りない自己啓発を希求する精神的能力の渾然一体化した「カロカガティア」という，人間のありうべき理想像に関する概念的遺産を今日に伝える。
【キーワード】ポリス，アレテー，カロカガティア，身体

【目次】
1．ポリスの特性
（1）戦士共同体，（2）ギリシャ人における自由，（3）スパルタの国制，（4）アテナイの特徴
2．英雄精神と身体性
（1）身体の社会的意義，（2）精神の彫刻，（3）英雄精神の土壌，（4）アレテーとカロカガティア，（5）アルキビアデスとソクラテス

* 北海道大学大学院教育学研究院・人間発達科学分野・健康科学（教授）

1．ポリスの特性

（1）戦士共同体

古代ギリシャのポリスは，過去のいかなる国家形態とも異なり，またそれ以後のいかなる国家形態とも異なる歴史上極めて独特の政治的な生活単位として登場する。それは，生存という極めて原始的な目的意志を共有したゲマインシャフト的共同体である。そこには専制的な支配者はいなかった。広大な領域を支配管理したのでもない。自給自足で自立的に生活を営もうとする小さな住民集団と，彼らが占める一定の空間があっただけである。ギリシャ精神とは，一言で言えばポリスの精神である。人間は政治的動物（zoon politikon）である，と翻訳されている文言でアリストテレスが言わんとしたことは，「人間はポリスの中で生活する動物である」(1) ということであった。「彼が示そうとしている事は，ポリスとは人間が自己の精神的，道徳的，知的能力を十分実現させうる唯一の枠組みである」(2) ということであり，人間はポリスの中でのみ，その人間的な可能性を最もよく開花させうる，ということであったに違いない。「ギリシャ人はポリスを市民の精神や品性を陶冶する積極的，有機的なものと考えていた。」(3) 歴史が示すように，ギリシャポリスは，ペルシャ帝国やローマ帝国のような強大な国家に発展できなかった。しかしそれはギリシャ人の精神と思考が，ペルシャやローマと比較して劣っていたからではない。大帝国が残した歴史的遺産以上に，古代ギリシャが歴史的源泉になっている理由こそ，逆説的に，ギリシャポリスが，ペルシャやローマ帝国を可能にしたものを欠いていた理由にほかならない。つまり，ギリシャポリスは，ペルシャやローマなどの大帝国が持たなかった人間史的な精神を持っていた。プラトンやアリストテレスは，ペロポネソス戦争後にあっても，つまりマケドニアやローマのような強大な国家の出現の前夜にあっても，ポリスの理想を凌駕する政治形態を語ることはなかったし，ギリシャのポリスが最もよい政治形態であると考えていたのである。この例からも明らかなように，時間の流れが歴史の進歩を意味することはなく，滅亡も繁栄も，その社会を構成した人間たちの優劣を判断する尺度にはならない。歴史は常に，人間を考える上での哲学的源泉である。「歴史的想起は，永遠と時間との苛烈きわまりない戦いをあらわす。そして歴史哲学はつねに時間と滅亡に対する永遠の勝利を例示する。…それは，不滅の精神が，滅亡の精神に対する勝利の碑である。」(4)

ギリシャポリス社会を産みだした客観的条件はミケーネ文明の没落にあった。「ミケーネ文明の崩壊すなわちミケーネ的貢納王政の没落は，共同体的成員を貢納制から開放し，…共同体成員が分割地所有者として自己の存在を確立することによって…個々の成員による私的土地所有のより発展した新しい共同体に転生した。」(5) つまりミケーネ文明における貢納制が，家族的土地所有や奴隷所有による家族の経済的自立を妨げていたのに対し，ポリス社会は，奴隷制を家族の内部に浸透させ，氏族的な自給自足（アウタルケイア）の生活単位を保障することによって成立した。「ほとんどの都市が，狭いが肥えた平野，高地の牧場，植林された山の傾斜，不毛の山嶺等々をすこしづつもっており，多くの場合，等しく海の近くにある。」(6) その地理的特徴は，陸地から攻撃するには困難であり，かつ頻発する海賊行為からの防衛のために，海からの攻撃にもかなりの困難さを与える地形であった。このため「海から攻撃されない限り，彼らは他国の干渉を受けずに，比較的自由に自己の方針にしたがって発展することができたのである。」(7) 個々のポリスは陸地を通じての交流に制限を

受け，広大な都市を形成することはできなかったが，しかし一方で海を介することによって，あたかも連鎖するかのように散在する島々を伝っていけば，イオニア地方やマグナグラキア（イタリア）やシチリア，あるいはエジプトへも到達することができた。「アッティカのオリーブ，メロス島の大理石，ペパレトスの小島のブドウ酒等」「多くの都市が，それぞれ特別の産物」をもち，「このことが，活発な取引と不断の交際を鼓舞したのである。」(8) かくして，「海はギリシャ人統一性を引き裂いて散り散りの切れ端に分裂させたかもしれないが，実は，ギリシャ人をまとめ上げ，独特の統一を与えた。この統一の中にあって，遠隔の地の各共同体は本国と接触を保持し，自分達はあらゆる点で依然として故国に属している，という自覚を持ったのである。」(9)

ポリスは，「個々の市民の分割地とは区別された公有地をもち，また守護神の神殿や役人の詰め所や，聖なる火の燃え続ける共同体のかまどから」(10) なっていた。自由，自治，自給自足を原則とするポリスは，したがって，所有する土地の全体を領域としてもつ小さな空間的な広がりしかなかった。「ギリシャ人は自分の政治的中心地から歩いて一日以内の所にいないとすれば，彼の生活は本当の人間生活からややちがったものであった。」(11) ほとんどすべての人々は同じ利害と目標を分かち合った。スパルタとアテネを含むいくつかのポリスが例外的な広がりをもっていたが，人口もまたそれに見合うように，アテネの最盛期でも市民は 3 万人程度に過ぎなかったのである。ただし，それはポリスを守備する市民の数であって，奴隷は無論のこと，女性や子どもは含まれず，さらの独立自由市民として認められていなかった人々や在留外国人は含まれていない。自治を原則としたために，「公正に裁き，功績に応じて官職を授けるためには，市民が互いに知り合い，また人々がどのような性質を持っているかを知っていなければならない。…（だから）一万人の成人市民からなる都市（ポリス・ミュリアンドロス）が大体において望ましい限度と考えられていた。」(12) プラトンの理想都市は 5,000 人であるべきであったし，アリストテレスがポリスのあり得べき状態を，市民各自がその他のすべての市民を目で見て知りうる範囲であるべきとしたように，「多くのポリスは 5,000 人より少なかった」(13) のである。因みに，ペルシャ戦争のとき，ギリシャ（ヘラス）同盟に参加した 31 のポリスの拠出した重装歩兵で最も多かったのはアテナイの 8,000 人であり，その以外の主要な兵員供出国は，スパルタ，コリントスなどの 5,000 人に過ぎなかった。(14) ポリスの戦闘能力は，重装歩兵の装備を準備できる比較的裕福な市民の数の依存していたために，一人の重装歩兵を支えるためには，少なくとも一人以上の軽歩兵が付き添うのが通常であった（スパルタでは一人の重装歩兵に七人の軽装歩兵）が，ペルシャ軍の数十万人という群勢には到底及ぶべくもなかったのである。当然のことながら，これらのポリス人口の数字に，女，子供や奴隷を含めると数は増加した。「三つのポリス，シシリー島のシュラクーサイとアクラガスとアテネだけが 20 万人を越えていた。ペロポネソス戦争勃発時当時，アッチカの人口は 35 万人ほどであった…。その半分がアテネ人（男，女，子供），約十分の一が在住外人，残りが奴隷であった。」(15)

およそ 1,000 と言われるギリシャのポリスは，それぞれ独自の起源神を有してはいたが，「土地と城壁から生育した都市の真の神々は，母とし指導者とし立法者として，各市民が死ぬまで防衛せねばならぬ礼拝され愛された存在として，永遠に人格的形相における都市そのもの」(16) であった。政治形態には多少の差はあっても，重要な特徴は，奴隷と土地を所有し，自己の配慮で耕し，独立して自己の生計を立てるとともに，ポリスの防衛や侵略戦争に

生命を賭して戦う兵士として参加した農民，あるいは商工市民たちによって構成されていることであった。「ギリシャ人たちは，いつも小規模で非常に競争的な多数の種族集合体もしくは政治集合体に分割されていたのであるが，それらの集合体のそれぞれは，自分たちがもっとも古い集合体であり，したがって他の人々よりもよりよき権利をもってその土地を所有している，と主張すべき義務を感じていた。」(17) そして各々のポリスは，同じギリシャ人でありながら，互いに敵対して略奪しあった。境界線を争う小競り合いは日常茶飯事であり，時には侵略して殺し合った。スパルタはBC8世紀，自分たちを労働から解放するためにメッセニアを侵略して征服し，メッセニア人を全員奴隷とした（第一次メッセニア戦争）。アカイア人とトロイゼン人によって建設されたマグナ・グラギア（イタリア）の都市シュバリスは，BC.510年ピュタゴラス派率いるクロトン人によって全滅させられ，ペロポネソス戦争時においても，アテナイはメーロス島を自国の防衛の拠点とするために，中立を貫こうとするメーロス人を力づくで攻略し，捕縛した成人を殺戮，女，子どもを奴隷として売り飛ばした（BC.417）(18)。このように，抗争と殺戮は幾度となく繰り返され，敗北したポリスの男性は殺害され，女性や子どもは奴隷に零落するという絶えざる戦闘は，ポリスを略奪能力と守備防衛能力の両面から，戦士共同体として鍛え上げることになった。かつての貴族王政の名残である豊かな貴族層は依然として有力な勢力ではあったが，しかし略奪を含む戦争の担い手が重装歩兵になるにつれて，兵士市民の政治的発言力は重みを増し，一方で貴族層の特権的地位と政治権力は弱体化しながら，独立した成年男子の自由市民の意志が政治に直接に反映される政治形態を模索するようになっていった。その典型はアテナイであるが，ここに，他の成員と政治的に平等な「市民」であり，同時に家族的な経済的自立の上に自由な「農民」であるとともに，ポリスという共同体を防衛する「戦士」が出現する。ただし自由な市民とは言いつつも，それは今日の近代的個人における自由という意味合いのものではない。市民は，自らの氏族ないし部族に属し，その共同体的意思をもって，「部族単位で投票もしたし，戦いもした。…劇のコンテストも部族単位であった。」(19) 戦闘を支えるポリス市民団の編成は，軍隊組織の基礎であったと同時に，政治活動の基礎でもあった。したがって市民間の争いは家族や氏族の争いの形式をとった。「家族への忠誠は依然として国家に対する忠誠よりも強固なものであったし，家族と国家の間に葛藤が生じた時は，彼らは家族への忠誠の方をとった。」(20) しかしそうであったとしても，働く農民であるとともに戦士でもなければならなかったポリス共同体の成員の共同労働の最大の義務が外敵との戦闘であった。ポリスのために生命を投げ打つという市民の絶対的義務は，「兵役忌避を死刑をもって罰」(21) し，脱走や敵前逃亡は市民権剥奪というポリスの規律で判断される。

ポリスは奴隷制を基盤にしたものではあったが，スパルタを除けば奴隷の収奪を主要な目的とした社会組織ではなかった。互いに群立していたポリス間の生存競争の渦中にあって，ポリスの存亡を賭けた農民戦士や自由市民の意志が国家的意志として平等に反映されていた社会共同体である。しかし重装歩兵の装備には相当な財力を必要としたために，政治的な意思決定者としての市民権をもつ市民は，ポリスの「特権的身分」でもあった。政治的あるいは社会的決断の場所としての民会（市民総会）に参加し，自分の意志を自由に述べたばかりでなく，その意志を投票という形で表現することができた。無論民会だけが政治的な意志決定機関ではなかった。長老会もあったし，ポリスを代表する王も選任されていた。しかし僭主政治といえども，市民団の支持がなければ存続し得なかった。アテナイのペイシストラト

スの政治にみるように，ポリスにおける僭主政治とは，決して一人の恣意的な暴君による専制支配ではなく，権力を握った僭主が，政治的に未成熟な市民の名を借りて専断政治を行った例はあるが，それはあくまで優勢の市民集団に承認された有力な個人による政治制御という意味合いのものであった。王は共同体の中で選ばれたが，特殊な権力の基盤や機構を持っていたわけではない。ただ王や長老会，あるいは民会という要素のうち，どれが国政を握るかによって，王政，貴族政，民主政，あるいは寡頭支配，多数支配と様々な統治形態が経験され，また模索されたのである。ポリスの政治形態の中核的推進力は，王政や，長老会，あるいは民会という段階的な機構が存在したとはいえ，あくまでも自立した自営の中小土地所有農民や商工業市民層であり，その合議制による共同体であったし，国家の意志決定者としての農民＝市民団の存在があったのである。この意味においては，ポリスは構成員間の市民的平等主義を形成していたということができる。それはポリスを守備する戦力が，一握りの権力者によってではなく，市民個々人の貢献に依存していることを意識した社会であったからにほかならない。「ギリシャ人にとって決定的であったのは…人間がその場所や財産よりもつねにいっそう重視されたということである。『諸君がどこに留まろうとも，諸君が一つの都市であるだろう』。」(22)

戦友が命の友であることは，近現代の戦争に生き残った兵士達の証言からも充分窺い知りことができる。それと同様に，ポリスの市民は，互いに顔見知りであるとともに戦友であった。「ほとんどすべての人々は同じ利害と目標を分かち合った。市街地に居住し製造，工芸に従事している人々も，あるいは海に生計の道を求める人々も，みな土地に親しんで育ち，土に生きる道を心得ていた。」(23) そして，いかなる職業に従事していたとしても，ひとたび戦争が起こったならば，「焼き付くような炎天下で，重装して 20 マイルの行軍を求められ，隣の男と同じくらいに勇敢に闘うことを求められ」(24) たのである。そこでは自らのポリスを守ることと，家族や自分自身やあるいは戦友のために闘うことに区別はなかったであろう。彼らは，互いに隣の戦友がどこの誰であるかを知り，その個人の性格や家族の構成，子供やその妻を知悉している人間的紐帯に支えられてた。ギリシャ精神を体現した戦士共同体の強靱さは，ギリシャ人が傭兵化していく時代の「アナバシス」にも見ることができる。BC.403 年，兄のペルシャ王アルタクセルクセスに対してクーデターを起こしたキュロン王に雇用されたギリシャ傭兵約 10,000 名は，キュロンの戦死後目標を失い，しかし軍隊の解体を免れながら，小アジアの内陸部の未知の土地 6,000 キロを走破して生き延び，あたかもオデュッセウスの如く，数々の苦難を克服して，2 年後にギリシャに帰還を果たしたのである。

（2）ギリシャ人における自由

「貴族制国家は，実に優れた人材を提供した。そしてこれらの人たちは協力して，ギリシャ的生活の理想を彼らの世紀の精神に則って実現したのである。すなわちそこには国家における共同統治，戦闘における有能，競技における栄光，そしてこうしたあらゆることをするために高貴な閑暇である。」(25) ギリシャ人は労働を恥辱と考えた。しかしながら，閑暇とは休息の時間ではなかった。余暇は，生きるための労働からは解放されているが，それでもなお，人間として生きるために「休暇とは成すべきことを為すための日」(26) であり，むしろこの余暇の時間で得られる人間的活動によって，彼らは自己の存在を意義づけたのであ

る。

「国家がよく治められるためには，市民が日常不可欠なことから開放された閑暇の状態にあらねばならない。」(27) ポリスのために戦う訓練に要する時間，教養を磨くための時間，これらのものがスコーレ（schole）であり，やがて学校を含意するものとなっていく。「スコーレとは，生産労働からはなれて，市民としてのアレテーを実現していくための時間的，精神的ゆとりのことであり，民会に出て国家意志の決定に参加し，国家的行事としての宗教的祭典に参加し，体育訓練をし，ポリスの政治や学問について討論をして知見を深める，というような公共生活あるいは公共性の強い生活を展開するためのゆとりを意味していた。」(28) そのために彼らは生産労働から解放された余剰の時間を求めたのである。「ポリス市民の閑暇は公的生活への参加または参加のための時間であった。」(29)

ポリスが存続し，閑暇が得られるためには，それを許容する生産性が求められる。この意味で，スパルタを頂点として，奴隷制は不可避であった。ニーチェによれば，特権階級に余暇を提供する奴隷制は，あらゆる芸術を産むための文化的本質である。ギリシャ人が追い続けたアレテー（卓越性）概念の裏には，労働を蔑視した貴族階級の態度が潜在している。ギリシャ人にあっては，労働は恥辱であることが公然と言明されている。アリストテレスは言う。「およそ自由人の身体あるいは精神を，徳の行使や実践のために役立たずにするような仕事や技術や学習は，卑しい職人向きのものとみなさなければならない。」(30) とくに，スパルタの思想は生産労働をすべて奴隷に任せ，そのことによって「望みうる限りの『閑暇の充実』を供与するもの」(31) であった。しかし，奴隷を収奪対象の集団として処遇したスパルタでは，奴隷労働によって得られた閑暇は逆に，常に奴隷への不断の監視に奪われていったという逆説がある。そのようなスパルタは特例であるとしても，アテナイが民主政を獲得してくい過程ですら，それが奴隷制と矛盾していると考えられることは決してなく，ましてや人権という概念はなかった。「技術と金儲けに従事して閑暇のないことを，彼らは奴隷に相応しいことと考えていた。」(32) 古典期の奴隷のほとんどが異民族であり，ギリシャ人は異民族は本来的に奴隷にふさわしいものと考えており，逆に奴隷にされることへの恐怖は，彼らのアイデンティティが破壊されることに由来していた。したがってギリシャ人は，社会的な死を意味した奴隷に転落することを嫌い，自由であるためには戦闘を辞さなかった。

「ギリシャ人がみずから受け継いできた慣習のうちで最高の価値を持つものは自由であった。」(33) 古典時代（BC5 世紀）のアテナイ人に代表されるギリシャ人の自由への執着は，生を実感するために必須のものであったように思われる。しかしこの自由は，近代社会が産み出した人間の尊厳や人権という概念に基礎づけられた精神的，文化的，あるいは社会制度的な自由を意味していたのではない。暴力こそが正義であった時代にあって，その自由性は，意志の具現として行動の方向性を意のままに選択し，決定しうる動物的な，あるいは本源的な選択可能性に起因した弱肉強食的な自由に近かった。それでもギリシャ人の自由は哲学的にも，芸術的にも発揮された。ギリシャ神話の多元性は，神話的自由を許容した。悲劇の創造も，彫刻の制作も，醜悪な逸脱でなければ許容された。これらの自由性を束縛する宗教的権威や強力な組織や神官は存在しなかった。ギリシャ人の思弁性，思考力は弁論によって発揮され，そこに活き活きとした哲学が社会を領導したのである。しかしポリス内での政治的確執があるとき，ギリシャ人は自らの集団を率いて新天地をめざし，意識的に国家（ポリス）を建設した。新たなる行動は，反復された現象の記憶の重畳がもたらす政治的な総合的

判断に依存し，その意味で，その総合は単一の現象とは異次元の高次の状況判断を基盤にし，判断は組織的行動への意志や意欲を形成することによって「創造的自由」へと連結する。人間の行動とは，現象としては現在的ではあっても，盲目的な反射的行動ではなく，それは自己の行動によって変貌する次の瞬間の世界，すなわち未来を予測したものである。しかして未来とは，仮構された現在（現在的に考えられた未来）であり，その未来を如何に仮構するか，あるいはその仮構された未来を現実として如何に現出させるか，ここに関わる意志や意欲が次なる現実を準備する。したがって未来は現象の創造と等価であり，それを可能にする行動は，創造性の根拠となる。この創造性こそが，人間（動物）に存在意義を賦与する。端的に，動物とは，行動によってのみ存在し，人間の創造性は，生きのびようとする動物的な目的を基盤として発展してきた行動の自由という人間の能力に依存している。

自由を得るためにもっとも重要な生活形態は，他者や交易に依存しない自給自足（アルタルケイア）であった。この自給自足を保障するために必要であったのは，食糧を供給しうるための土地，生活を維持するために最低限の必需品を充たす近隣との交易，そしてポリスを防衛するための戦士の存在であった。新たなポリスにおける新たなる立法は，創造的かつ自由な行為であった。彼らの自由は，アウタルケイア（自給自足）という生活態度において政治的，文化的，社会的に保証されたのである。したがって，交易や商業活動の拡大によって，生活がポリス以外の地域に依存すればするほど，自給自足は破綻していき，ポリスの本質的な変貌に繋がるものであった。当然のことながら，自給自足体制は，貨幣制度や商業の発展にともなう金融の発達によって少なからず影響を受けることになる。戦士共同体が，やがて金銭による傭兵に依存していくのと期を同じくして，自給自足を自由の原理としたポリスの精神には大きな構造的変容が起きざるを得なかった。しかし，歴史的に，ギリシャにおける自由を強烈に刻印したのはペルシャとの戦いであった。

ペルシャ戦争において，ペルシャに対抗したのは僅か 31 のポリスに過ぎない。ギリシャ攻略の兵を起こしたダリウス一世やクセルクセスの何十万，何百万人という軍勢に，弱小ポリスは抵抗する力を持ち得なかった。どのポリスであるかに限らず，地域間の紛争・戦争は，敗れたポリスの人間を奴隷にする危険性をも常に孕んでいた。とくに大きな戦争の場合には，勝利が期待される側に汲みすることは，ポリスが存続しうるための政治的な決断であった。生存するための恭順とペルシャ側に加わることは，現代においてもほとんど変わることのない政治リアリズムである。事実，結果的には最終戦であったプラタイアの戦いにあっても，ペルシャの固有の軍隊が逃げ出すのを目撃するや，「他の民族は…一撃も交えることなしに逃走したのである。」(34) 換言すれば，ギリシャ防衛という大義名分など，ヘラスに生きる人々に，それがおのれの生存の極めて重要なアイデンティティとして認知されていた訳ではない。ギリシャの防衛やギリシャの自由という概念は，むしろ BC5 世紀のペルシャ戦争の過程で醸成されたものである。クセルクセスは，ギリシャへの遠征に先立ち，スパルタから亡命していたデマラトスに向かって，人は「指揮官を怖れる心から実力以上の力も出そうし，鞭に脅かされて劣勢を顧みず大軍に向かって突撃もしよう」(35) との人間観を披瀝しながら，ギリシャが果たして強大なペルシャの大軍に抵抗しようとするかどうかを尋ねる。デマラトスは亡命の身でありながら答えて曰く，「ギリシャに隷属を強いるごとき殿（クセルクセス：引用者）の御提案は，絶対に彼らの受諾するところとはなりませぬ。」(36) たとえ他のギリシャ人が恭順の意を示そうと，すくなくともスパルタは刃向かうであろうし，

「あくまで己の部署にふみとどまって敵を制するか自ら討たれるか」(37) するだろうと応える。ヘロドトスがこの会話で鮮明にしようと意図したのは，社会を構成する人間の精神原理そのものであった。

ペルシャ戦争の過程で，アテナイは二度に亘って町をペルシャ軍に蹂躙された。にもかかわらず，彼らは人々さえ保全されれば町は生き残ると考えていた。そのため女，子どもを他のポリスに疎開させ，全軍を艦船にのせて海上でペルシャを迎え撃ち，ペルシャ軍が撤退したあとでアテナイを再建した。アテナイはペルシャの軍隊が圧倒的な多数であることを認知していた。しかし同時に，イオニア反乱以降，ペルシャとの交戦は不可避であると考えていた。したがって抗戦の理由として，彼らの信仰の対象である「神々の神体や社殿が焼き払われたこと，…われわれが等しくギリシャ人同胞であり，血のつながりをもち，言語を同じくし，神々を祀る場所も祭典も共通であるし，生活様式も同じであること」(38) を意識することによって，ギリシャとしてのアイデンティティを創造し，また獲得していったのである。「もしアテナイ人が迫り来る危難に怯えて祖国を放棄していたならば－，またよし放棄しなかったとしても留まってクセルクセスに降伏していたとすれば，海上でペルシャ王を迎え撃たんとする者は皆無であったろう。…ペルシャ海軍によって都市が次から次へに占領されていけば，スパルタの同盟諸国も不本意ながらスパルタを見捨てるほかはなく，スパルタは孤立無援の状態に陥ったであろう。…ギリシャの自由を保全する道を選び，ペルシャ王に服せずに残ったあらゆるギリシャ人を覚醒させ，神々の驥尾に附してペルシャ王を撃退したものこそ，このアテナイ人に他ならなかった。(傍点引用者)」(39)

しかし，ギリシャポリスにおける自由とは，共通であるべき普遍的概念として存在していたのではない。「一般原則として，自国の自由と主権を油断なく守ることは，理論上も実際上も，別のギリシャ国家から自治と独立を奪うことに矛盾するものとは考えられなかった。」(40) つまり，自己のポリスとギリシャの自由を旗幟にペルシャと闘ったアテナイは，一方でギリシャ人同胞の自由を簒奪するのである。ペロポネソス戦争開始後の BC.416 年，住民が元来ラケダイモン人でり，かつ海軍力をもち，またエーゲ海の交通の要衝であるとの認識から，アテナイ軍は，それまで中立を保っていたメーロス島を包囲し，投降を迫った。この「メーロス会談」において，メーロス人は，「中立国として，敵になるよりは友好国として，どちらの陣営にも味方しないでいる状態を」認めるようにアテナイに求めながら，島を包囲し，威圧しながら「戦争がもはや既の事実であって未来のことではないのに，静かに相互の意見交換」(41) しようと持ちかけるアテナイの姿勢を批判し，かつ「当然の結果として論議に勝っても，それだからといって我々が譲らなければ，諸君は戦争をもたらし，屈服すれば隷属を我々に強いるだけだ」とアテナイ人の会談に臨む態度の矛盾と不正義とを論理的に糾弾した。これに対しアテナイ使節団は，メーロス島の攻略には何らの大義名分もなく，「我々が交渉相手として諸君に期待することは，…弱肉強食の原則と客観的人間理性の論理的必然性が正義であるとする原則にのっとって，双方が希望することを明示する」(42) ことであると言い放ち，「諸君は我々と対等の立場で体面を賭けて武勇を競っているのではなく，むしろはるかに強大な者と争う必要のないように，諸君の都市の存亡について会議を開いている」(42) のだと迫った。弱肉強食を強制する傲慢なアテナイ帝国に，それでもメーロス人は屈しなかった。「自由である我々が人事をつくして隷属化に抵抗しないことは，不義であり怯懦である」(42) と応えるとともに，「七百年の伝統あるこの国から寸刻たりとも自由

の失われることは我々の許すことではない（傍点引用者）」(43) として隷属の生存を拒否し，メーロス人は開戦を決意した。彼らが，幾度もアテナイの食糧基地を急襲していることから，兵糧攻めにあっていたことが想像される。半年の包囲ののち，メーロスは無条件降伏を強いられ，捕らえられた男性はすべて殺戮され，婦女子は奴隷として売られていった。かくしてメーロス島は，自由なるポリスとしてのアイデンティティを貫きながら滅亡していったのである。しかしアテナイの野蛮性が重要なのではない。「敗者たる者は，妻子，財産，生命もろともに勝者の所有に帰する」(44) といういわば国際法規以外のいかなる正義も存在しない時代であったからこそ，自由の保持が，いかに切望されたかを私たちは理解することができる。

（3）スパルタの国制

スパルタにおいては，ポリス社会の共同体原理が極端な形態で実現していた。「スパルタは農奴の労働によって支えられた市民階級たる常備群をもつ唯一の国家であった。」(45) スパルタは，参政権を有する自由市民（スパルチアテース），参政権はないが自由な身分であった周辺人（ペリオイコイ），参政権はおろか，自由すらない奴隷（ヘーロタイ）から構成され，スパルチアテースは「農業，商業，職業的な仕事に従事することを禁じられていた。」(45) このため，商業的な生産活動を停止し，アテナイのような社会発展をたどることはなかった。スパルタの経済的基礎は奴隷による農業的生産活動であり，市民団は，一切の生産労働から解放されて，政治と軍事に専念し，奴隷の集団監視あるいは抑圧機構と対外的な戦争のための常備軍としての役割を果す戦士団であった。この形態は一般の市民が戦時に戦士となる他のポリスとは決定的に異なる側面である。奴隷は，アテナイなどの家内奴隷と異なり，集団を構成してスパルタの共有財産としての一つのクレーロス（氏族）に属し，小社会を形成し，家庭を営み，次世代の再生産（子供の養育）を含む生産労働に従事するいわば自律的な社会であり，スパルタ市民の人口を遙かに超えていた。このため過酷な奴隷労働から解放されようと，奴隷集団はしばしば反乱を起こした。とくに BC8 世紀中判（BC.724 年，第一メッセニア戦争）に征服されて，奴隷にされていたメッセニア人は，スパルタがアルゴスとの戦闘（ヒュシアイの戦い）に敗北を喫したのを機に，BC.685 年，他のポリスを巻き込んで，スパルタに対して大規模な反乱を起こした（第二次メッセニア戦争）。スパルタは幾度も敗北を重ねた末に，辛うじて反乱を鎮圧することができたが，スパルタの奴隷監督官は，いつでも奴隷を殺戮する用意があることを示すために，「毎年就任にあたって，ヘロータイに宣戦した」(46) という。またスパルタの若者も，疑わしい奴隷を殺すことが許されていた。それほどまでに奴隷に脅かされるポリスであったということができる。この奴隷の反乱に対するスパルタ人の危機意識は，自らの生存を裏付けるものとして，いつも研ぎ澄まされていた。とくに，屈強で自立心の強い奴隷に対して警戒を怠らず，屈強な奴隷の力を削ぐために，「戦いで立派な働きをしたいと思うものは自由民にするから申し出るように」と誘いをかけ，名乗りでた 2,000 名に及ぶ奴隷を神殿に迎え入れて殺戮するという策略までも弄したのである。(47)

スパルタにおける青少年教育は，ポリス共同体の存続を第一義的に考えた共産主義的教育であり，それは多くの快楽を断念し，強烈な克己精神の育成に貫かれた教育であった。生ま

れた子供は親の私物ではなく，育てる権限もなく，国家の共有物であった。7 歳になるとポリスの養育所に入れられ，少年隊に編入され，裸同然の粗衣粗食の共同生活を送り，スパルタ社会でのアレテー（arete: 卓越した性質：次章参照）を身につける体育教練を施された。職業に従事することは禁じられ，戦士になることが彼らの使命であった。共同体意識を支える血族的な市民資格は厳格に保持され，一方で若い兵士は戦争で死亡していったため，スパルタは市民資格をもつ人口の慢性的な不足に悩むことになる。スパルタでは，BC6 世紀初頭頃から，連続する戦争によって失われる戦士と長期に及ぶ兵役によって出生率が低下し，市民の数が減少し始めた。さらに人間関係においてもっとも初源的な家族という枠を破壊した教育制度は，人口減少に拍車をかけた。夫は，夜の閨だけを共にする妻の顔さえ明確に覚えることができない「家族」であった。それでも「家族が三人の場合には，その父の兵役を免除し，四人の場合には市民としてのあらゆる義務を免除するという立法」(48) で出産を奨励したが，人口減少を食い止めることは出来なかった。BC.480 年，ペルシャ王クセルスクセスの率いる数十万の軍隊がギリシャに押し寄せたとき，防衛の先遣隊として出兵していたスパルタ軍はテルモピュライの地峡で玉砕したが (49)，死が不可避であることを覚悟したスパルタの将軍レオニダスは，世継ぎのいない家庭から出征してきた青年兵士を帰還させた。これは明確に，ポリスを支える世代を温存し，ポリスの存続を保障しようとするための判断であった。防衛する成人を失ったポリスの安全は保障されなかったし，後の世代が成長するまで，高額の費用をかけて傭兵に頼らなければならなかったからである。

スパルタの子ども達は「敵に対する巧妙な攻撃と狡猾さを養うために」盗みまでも奨励された。行動の善悪の判断基準は，ポリスの勝利という何にも代え難い目的のためであったから，それが非道徳的であるとは考えられなかった。発言は簡潔かつ単刀直入が良いとされ，冗長な発言は評価されなかった。当時のポリスの生存競争の状況において，質実剛健をモットーとし，多くの享楽的なものを放棄・断念しながらも，卓抜した戦闘能力をもつ人間の開発に腐心したスパルタは，かくしてギリシャにおいて最強の重装歩兵部隊による密集方陣形（ファランクス）を誇った。ペルシャ戦争後にアテナイが統帥権を握るまでは，他のポリスと同盟軍を結成する際には，スパルタが決まって指揮権もしくは統帥権を握ったし，その他のポリスもこれを支持し，あるいは容認していたのである。スパルタの教育は女性でも例外ではなかった。リュクルゴスは「彼女たちの身体を競争・格闘・円盤投げ・槍投げによって訓練したが，その目的は，胎児の形成が強健な身体の中でますます力強く始まってますます良好に進み，彼女たちも体力のある状態で出産を待ち，陣痛にたいして立派にまた同時に容易に戦えるようにということであった。」(50) しかし明らかにスパルタは人間の個性や社会の文化に対する価値を過小評価していたし，国力が暴力機構にのみとどまらないことを理解していなかった。換言すれば，奴隷抑圧と収奪に特化したスパルタは，哲学者も芸術家も寄せ付けず芸術・文化的には全く不毛なポリスであった。互いの贅沢を牽制し，あるいは監視しあいながら，最も珍重された「黒いスープ」を含む共同の食事（フィディティア）を取らなければならなかったから，「スパルタ人の生活からすべての優雅さや魅力は消え失せ，都市は，…兵舎の外観を呈していた」(51) という。同時に，このドーリス人からなるスパルタ社会を「模倣したポリスがなかったということは，ポリス市民の大多数が，スパルタのようにきびしい生活の中に生きることを欲していなかったということを示すものである。」(52) ポリスの存続のための戦力の保持と，労働からの解放という優先事項を実現するために，多

くのものを断念し質素や節制に貫かれたスパルタの国制は，その他のポリスから模倣されるどころか，むしろいやしい国制として退けられていた。ここにギリシャの最大の矛盾があった。つまり，ある意味では，ペロポネソス戦争は不可避だったといえる。それはアテナイとスパルタが産み出したそれぞれ特徴あるポリス精神のアイデンティティに起因する闘いでもあったといえるからである。BC.434 年，アテナイは，デロス同盟から脱退しようとしたコリントス人の植民都市ボティダイアを包囲し，これに対抗してコリントスも派兵してペロポネソス戦争勃発の引き金となった。アテナイを撤退させるために，スパルタを参戦させようと迫るコリントス人の言を借りて，トゥキディデスはスパルタとアテナイを活写する。

「アテナイ人は進取の気性をもって工夫に富み，計画の遂行に強い行動力をもってあたる。これに反し諸君（スパルタ）は現状の維持を慮って新しきを企てず，必要な行動にもことかいている。…アテナイ人は実力をさえ上回った目的をさえ抱いて，予想外の冒険を冒し，虎穴の虎児を得ようとするが，諸君は自らの能力，知力さえ十分に活用した行動を取らず，盤石も疑い，常に戦戦兢兢とした思いから放たれない。…かれら（アテナイ人）は国外発展をもとめるに対し，諸君は国内に蟠踞する。彼らは外地侵略に新しい利益を望むが，諸君は遠征の国内に招く破綻を考えるのだ。アテナイ人は敵を破ってあくまで勝利を利用し，敗れて最小限の後退をする。国のためにはわが身を我をも思わず挺し，国のためとあらば事の遂行にあたって，その目的を決して他人事としない。机上の計画だけで行動に移されなかった事柄をも，彼らは事実上の損失と数える。…万が一にも事なかばにして挫折するや，彼らは常に他の企てをもってその欠損を補う。…彼らは労苦も危険さえも厭わず，このすべてに生涯を賭けて励み，…絶えざる刻苦より無為閑暇をわざわいとする。ラケダイモーン（スパルタ）人諸君，このような国が眼前に立ちはだかっているのだ。」(53)

スパルタに開戦を迫るコリントス人の弁舌，正確にはトゥキディデスの「創作」は，それでも決して架空の作り話などではなく，スパルタを焚きつけるための言説上の脚色があったとしても，アテナイとスパルタの市民的態度とその精神を鮮明にしていると言えるだろう。歴史が示すように，ギリシャ全軍がマケドニアに敗北したカイロネイアの戦い（BC.338）を待つまでもなく，このペロポネソス戦争において，軍国スパルタがアテナイを破ったとき，そのスパルタの勝利は，ギリシャポリス文化の終焉を意味していたと言える。「スパルタによってもたらされたアテナイのこの敗北が国外ではギリシャ自身の敗北ともギリシャ都市国家の担うべき希望の敗北とも感ぜられた。」(54) それほどまでにスパルタの勝利は，ギリシャの将来的な展望を奪う逆説的なものであった。戦争のために市民を鍛えたスパルタは，ポリスの精神，すなわちギリシャ精神の一部を極端なまでに追究し，そのことによってポリスの精神の世界史的な意義を踏み誤ったといえる。

（4）アテナイの特徴

アテナイにおいては，ドラコンの立法時（BC.624-23）の市民権は，負債がなく自費で武装しうる人々に与えられていた。しかし貧しい農民は身体を抵当に借金し，やがて少数の貴族支配に抗した民衆の蜂起によって，ソロンが調停者に任命され（BC.594），身体を抵当にすることを禁止するとともに，負債のすべてを帳消しにし，市民を保有する財産の過多によって四等級に区分し，それぞれの役職を財産別に序列化した。このソロンの大胆な改革によって，アテナイ市民は国事（民会と法廷）に参与する権利を有し，民会は国家の最高で最終の立法機関となった。ポリスの特権的身分である市民権は，すでに奴隷となって国外に売られ，流浪していたものまでも祖国に帰国させて与えられた。これらの中には「もはやアッティカの言葉を語りえなかった」ものも含まれていたという(55)。さらにソロンは市民の政治的自覚を促すために，とくに「国内に抗争のあるとき，両派のいずれにか与して武器をとることのないものは，市民たる名誉を喪失し，国政に与り得ぬこととし」(56)，政治への無関心を強く戒めたのである。「アテナイの名誉は，単にこのような男（ソロン）を生み出しただけでなく，彼に信頼を捧げ，そして少なくともこの過渡期のあいだに彼に服従したという」(57) 社会的成熟である。父系制社会であったから，財産は男系に相続され，したがって兄弟のいない女子相続人は，父の系統の男子と結婚して財産を相続する義務を負った。財産の過多によって別れていた党派（海岸党，平野党，山地党）闘争ののち，貧しい農民を代表していた山地党のペイシストラトスは，一旦追放されるも帰国を果たし，民衆の支持を取り付けて僭主政を確立し，市民から武器を取り上げる一方で合法的かつ穏和に国政を行った。しかしペイシストラトスの後を継いだ子どものヒッパルコスとヒッピアスの政治は乱暴になり，市民から反発を買ったヒッパルコスは暗殺され，ヒッピアスも追放されて，ペイシストラトス一家による延べ 49 年に及ぶアテナイの僭主政治は終わりをつげる。その後アテナイでは，民主派の最大の功労者であったアルクマイオン家のクレイステネスによって，更なる改革が断行された（BC.509）。全男性成人市民に参政権を与え，それまでの評議会を解散させ，四部族を十部族に細分化し，それぞれの部族から 50 人を選出させて 500 人からなる評議会を創った。また，圧倒的に優勢の僭主の出現を防ぎ，競争的環境を保証するために，BC.507 年陶片追放（オストラキモス：BC.507/8 ～ BC.417）を設けて，6,000 票以上の多数によって指名されたものは，市民権の剥奪こそなかったものの，10 年間アテナイを離れなければならないと定めた(58)。

イオニアの叛乱ののち，ギリシャ本土のポリスにとって最大の危機となったペルシャ戦争は，事実上，二回の陸戦（BC.490 年マラトン，BC.479 プラタイア）と二回の海戦（BC.480 アルテミシオン，BC.480 サラミス）で決着した。マラトンの戦い（BC.490）からの次の海戦にいたる空白の 10 年は，エジプトの叛乱とダリウスの死に起因したペルシャ帝国の混乱によるものであったが，この 10 年は大きかった。なぜならアテナイではラウレイオン銀山が発見され，この資金によってアテナイはテミストクレスの進言に基づいて 200 隻の軍艦を建造し，最強の海軍国になっていたからである。ペルシャ戦争に勝利したのちに結成されたデロス同盟の金銭がアテナイを潤し，自信を取り戻したアテナイ市民は，BC.461 年それまで司法権を独占していた貴族的世襲制度「アレイオ・パゴス会議」から大半の司法権を奪い，500 人評議会と民会および裁判所にその権限を分散し，このことによって民会の力は格段に向上した。かくして市民権の増大は，アテナイの政治に大きな力を持つようになったが，市

民資格が厳格に審査・管理されていた訳ではない。人々は依然として，氏族か胞族（プラトリア：兄弟団）に所属し，婚姻は，饗宴の形で氏族員や団員に紹介され，産まれた子供も生後 3 年ほどしてから，結婚式や宴会で団員に紹介され，アパトウイリア祭で，幼児はプラトリアに登録され，成人に達したものは成員となった。このような状態であったから，人口が増加するにともない，身元の不確かな市民の数も増加していった。このためペリクレスは BC.450 年，「アテナイ人を両親として産まれたもののみが，アテナイの市民身分たるべし」(59) と定めた市民権法を成立させた。市民資格は真正のギリシャ人であることを意味し，その出自が厳格に審査されたオリュンピア祭を初めとした多くのギリシャの祭典の参加資格を意味していた。しかしペロポネソス戦争開始直後の BC.429 年，アテナイには疫病が蔓延し，ペリクレスは先妻との間に出来た二人の息子を失ってしまった。疫病で壊滅的な打撃をうけたアテナイは，この難局を乗り越えられる人物として，政治の表舞台から退いていたペリクレスに再び政治の舵取りを懇請した。このとき，ペリクレスは－自分の作った市民権に関する法律を侵して－ミレトスからアテナイに来ていた聡明な遊女（性的対象としての娼婦ではない）アスパシアとの間に出来た私生児 (60) をアテナイ市民にする条件で，アテナイ市民の要請に応えた。しかしペリクレスもまたその疫病に斃れた。

「アテナイでは，負が一定額を超えた人は，年ごとの当番として一種の礼拝式を行わなければならなかった。…彼は一年間，戦艦を就役させ続けなければならなかったか，または祭式の劇の制作に資金を提供しなければならなかったか，または，宗教的行列を準備しなければならなかった。それは重い負担であったり，疑いもなく歓迎されなかったが，すくなくともある喜びが得られ，ある誇りがそこに含まれていたのである。」(61) 富めるものが，ポリスのために財産の拠出を惜しむことは，徳を失する行為だった。ほとんどの裕福な市民は，すすんで財産を提供し，そのことによって何にも代え難い市民からの尊敬と名誉を享受しようとした。自己の模範的なアテナイ人であるためには，三段櫓船艤装負担（トリエラルギア），合唱隊費用負担（コレギア），体育行事負担（ギュムナシアルギア），友人への援助や保証金，客人の饗応などを自発的に行うことが求められた。したがって大デュオニソス祭などでの新作悲劇の競演によって勝利した場合の名誉は，作者はもとより，公には，費用を負担したコレギアに与えられたのである。貧困は恥ではなかった。貧乏は当然のことながら好まれなかったが，それは，豊かであることがポリス的人間の重要な条件として考えられたからではなく，「自分の欲するままに，自分の友人を助けることを不可能にさせるから」(62) であった。この意味で富は，いわば偶然の豊かさと認識され，貧困と人間的価値とは明確に峻別されていたといえる。

アテナイの際だった特徴の一つは，イオニアの伝統を受け継ぐ思考と表現の自由性と，その葛藤による優れた政治的衝動であり，誰もが議論に参加して弁証の能力を磨き，多くの哲学者をアテナイに引き付ける動因になった。一方で，芸術的衝動としての悲劇も，デュオニュソス祭礼の一環としてアテナイに起こったのである。それは神託や知恵を伴いながら，変更しようのない筋書きを唱う合唱隊（コロス）による神話的運命に，俳優としての人間が介入していくドラマである。神話が示すように，必死に介入すればするほど－オイディプスが実父を殺し，忌むべき結婚の定めに陥るように－努力する人間は悲惨な結末を迎える。悲劇には音楽が付随した。音楽は概念（ことば）を必要とせず，思弁的な言葉では到底到達しがたい強力な影響力をもってギリシャ人の感情を揺さぶった。荘重な音楽とともに，その背後に背負う自らの過酷な運命と苦悩を可視化しようとしたギリシャ人たちは，生きることの無意味さを

反芻し，嘆いたのではない。むしろ，己れの内部に押さえがたく燃え立つ生存の意志，如何に運命に翻弄されようとも，「人間は無罪である」という，潜在的であるが強力な生命肯定の意志を確認し続けたのである。非理性的生の欲望は，デュオニュソス祭に相応しい。すなわち，アッティカ悲劇は，ギリシャ人がオリュンポスの神々を必要としたまさに同じ動機によって可能だった。デュオニュソス的精神の意義を鮮明にしたニーチェは言う。「あれほどにかぎりなく敏感で，あれほど輝かしくも苦悩する能力を備えた民族は，もしその現存在が，神々のなかで高次の栄光に包まれて啓示されなかったとしたら現存在に耐ええたであろうか！生き続けるようにと誘惑する，現存在の補足と完成としての芸術を生のなかに呼び込むのと同じ衝動が，オリュンポスの世界，一つの美と安静と享楽の世界を成立せしめたのである。（傍点原文）」(63) 若々しく理知的で，彫刻に具象化された逞しく明るいアポロン的世界観と比較して，デュオニュソスのイメージは驚喜と性的放縦によって神秘的であり不道徳ですらある。このアジアからの伝統は，しかしそこにこそ，アポロンを穿ち，アポロン的精神との格闘による創造性を保障する。人間を賦活して止まなかった詩人の手になる悲劇を観るために，人々は遠くからアテナイを訪れたと考えられる。

オリュンポスの神々を鏡として，いかんともしがたい人間の掟を悲劇として幾度も喝采しながら鑑賞したギリシャ人たちは，悲劇が示す運命に引きずられるように，ポリス社会の消滅への道を突き進んでいった。ポリスが自給自足の戦士共同体の骨格を喪失することは，古代ギリシャポリスの本質的な精神的骨格を失うことを意味していた。ソクラテスが刑死（BC.399）して 5 年後，アテナイを含む反スパルタ連合軍は，コリントス戦争におけるクニドスの海戦（BC.394）でスパルタ軍を全滅させ，コロナイアの戦い（BC.394）でもスパルタ将軍アゲシラオスを破ったが，すでにそこには自分のポリスに生命をなげうつ志に貫かれた戦士達の姿はなかった。かつてのポリスを支えた戦士共同体は崩れ，金銭に生命をかけた職業的戦士（傭兵）による勝敗に過ぎなかったのである。

「都市国家，すなわちポリスこそはギリシャ人の心の抱くほとんどすべての忠誠と憧憬の的であった。それは生命に保証を与えた。それは信仰に意味を賦与した。そしてアテナイ市の没落のうちに都市国家も滅んだのである。（傍点引用者）」(64) 多くのポリスの富を私物化し，それでも 2,500 年後のアテナイに建つアクロポリスの華麗な残骸と，奴隷を搾取し，しかして自らも“黒いスープ”に甘んじた痕跡もない軍国都市スパルタの残映は，ギリシャの精神的豊かさと悲劇を共鳴しあいながら伝えてくる。

２．英雄精神と身体性

（１）身体の社会的意義

ギリシャ人は，ポリス社会の存続の本源的な武器が身体であることも熟知し，同時に身体の創造性を認識していた。したがって，古代ギリシャ世界において身体の持つ意義は極めて大きく，その価値観やイデオロギーを含めて，強烈な男性社会を構成した要因であった。戦うことができない男性はほとんど価値がなかった。「健全なもののみが生きるに値する」(1) と考えられ，「奇形児は…その家族にとっての不幸であるだけでなく，その都市全体，いやその民族にとって，神々の怒りの宥和を希わねばならぬ恐怖なのである。それ故，いかなる

ものもこれを養育すべきではなかった。」(2) スパルタでは病弱で不虞な子供は生まれてすぐにタイゲストス山麓の穴に捨てられた。同様に，不治の病にかかっている「人の生命を医術によって引き延ばすことは，公然と非難された。」(3) プラトンは書いている「生まれついての病気持ちで不摂生な者は，本人にとっても他の人々にとっても生きるに値しない人間であり，医療の技術とはそのような人々のためにあるべきでもない…。」(4)

弱肉強食の時代にあって，都市が生き残るためには，闘いのエトス（ethos）が不可欠であった。ギリシャ人はポリスと連結している自らの生き甲斐の根拠を，近代人がその社会に対してもつものよりは遙かに本質的に理解していた。兵役拒否は死刑であった。最大の武器である身体の毀損による自殺も断罪された。「アテナイでは自殺者は都市にたいして不正を犯したものとして権利剥奪によって罰せられ，正式の埋葬の栄誉を拒否された。そのうえ，死体の手は切り取られて，別々に埋められた」(5) のである。

身体のもつ政治的な役割も少なくなかった。「ギリシャ社会では，体が弱く，肉体的に欠陥のあるひとが大きな社会的，政治的権力を有する地位についたり，あるいはそれを維持することはほぼ不可能であった。肉体的力，肉体的美しさ，均整，忍耐力はギリシャ社会では男性の社会的地位の決定要因として，…はるかに大きな役割を果たした。」(6) したがって，屈強である男性は政治的にも成功しうる可能性が高まったのである。「大規模な祝祭における勝利を通じて肉体的力，敏捷性，勇気，忍耐力を証明した男達は，かれらの故郷の社会で社会的，政治的に高い地位を，もしかれらがそれをまだ獲得していない場合には，つかむ見込みがあった。…勝利を収めたならば，かれらは家族や故郷の町に名声をもたらし，それ以降，そこの支配的エリート階級の一員として数えられる大きなチャンスを得たのである。」(7) 身体は外見であったが，「他ならぬギリシャ人こそ，人間の外貌のうちにその内面を見いだした民族である。」(8) ギリシャ人にとって「人と内面が高貴に関連しているという考えは，もっとも確固たる信念に関わる問題だった」(8) すなわち身体は精神の鎧として受け止められていたのではなく，身体こそが精神を表現していると考えられたのである。

BC8 世紀に，アテナイでは，「オリンピア競技に優勝したキュロンが思い上がりの末に独裁を夢見て」(9) 同輩とともにアクロポリスを占領した事件をヘロドトスは書き留めている。結局このクーデターは鎮圧されたが，ポリス社会が求めた人間の身体への執着は，オリンピア祭などで披瀝される躍動的な生きた身体ばかりでなく，魂を失った身体に対しても示された。トロイア戦争において，ヘクトールに討たれたパトロクロスの遺体をめぐって，あるいは「アポロンの矢」によって天誅をうけたアキレウスの遺体をめぐって，トロイア勢とアカイア勢との間で苛烈な争奪戦が展開された。アキレウスに討たれた息子ヘクトールの遺体の返却を請うために，トロイアの老王プリアモスは，莫大な金品を持参して単身アカイア（ギリシャ）勢のアキレウスの陣営に赴く。神話のみでなく，ペルシャ戦争においても，テルモピュライで戦死したレオニダスの遺体をめぐって幾度となくペルシャとギリシャ軍の間で，争奪戦が繰り広げられた。それほどのリスクを侵しても，身体は引き取られなければならなかった。遺体への畏敬の念は，自軍のみに留まらなかった。プラタイアの戦い（BC.479）で戦死したペルシャの将軍マシスティオスの死体をめぐっても，争奪戦が繰り広げられた。ペルシャは彼の遺体を奪還するに至らず，その遺体は，車に載せられて町中を引き回されたが，その美しい容姿や身体を一目みようと，ギリシャ人の多くが寄せ集まったのである。美しい身体に抱いていたギリシャ人の観念は，神から授けられた神々しさを意識したものであった。

ソクラテスはいう。「ほかの生き物とくらべて人間は神々のごとく生活し，その生まれつきにおいて身体も魂も遙かに卓越している。（傍点引用者）」(10) ポリスの存続をかけて，いわば骨肉の争いをつづけたポリス間の戦争においても，いかなる戦いの後にも，両者は休戦条約のもとにほとんどといってよいほど戦死した者の遺体を引き取り，敵の戦死者の死体も，勝敗に拘わらず送り届けた。多くの戦いを叙述した後のトゥキディデースの段落は，互いに「休戦条約のもとに遺体を引き取った」で終わることが多い。ギリシャ人たちにとって，身体に対するその行為は戦死者への追悼の意味ばかりでなく，身体を引き取り，かれらの手で埋葬して神の目から遠ざけることが，ギリシャ人にとっては極めて重要な意味を持っていた。

BC406 年，シケリア遠征で壊滅したアテナイが，海軍力の再建をめざしてスパルタと闘ったアルギヌーサイの海戦において，アテナイ群は勝利をおさめたが，それを率いた将軍達は暴風雨のために戦死者の遺体を引き上げることができなかった。そのままアテナイに帰国した 6 人の将軍は，凱旋将軍であったにも拘わらず，遺体を回収しなかった咎で弾劾裁判にかけられたのである。この裁判のとき，議長に選出されていたソクラテスは反対したが，結局議長が変えられ，将軍達は有罪の判決を受けて処刑されてしまった。当時の将軍とは，後陣に蟠踞して指揮した人々ではない。前線に真っ先に立って自ら範となるべく闘った人々である。このために，将軍の戦死例は夥しい。このとき，処刑された将軍の中には，自らも病に伏したペリクレスがアテナイ国民に懇請してようやくアテナイの市民資格を得，のちに将軍となった私生児ペリクレス（アスパシアとの間に生まれた子供）が含まれていた。

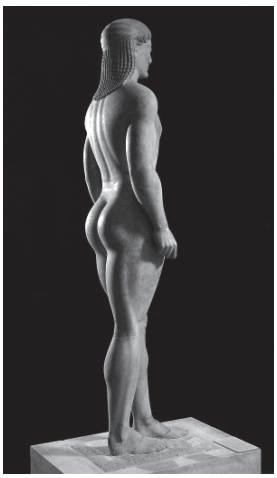
市民がみな顔見知りだった古代の都市国家において，同胞を失うことの衝撃ははるかに大きく，戦死者の葬儀はすべて国葬だった。戦死者のすべての遺体が引き取られると，「まず天幕を張り，逝去者の骨をそこに三日間安置し，おのおのの縁者はそれぞれ思い思いの供物そなえ，その後に埋葬場への行進があって，各部族のごとの骨が納められるのである。死体収容時に発見されなかった行方不明者たちのためには覆いをかけた空の柩車が一つ運ばれた。市民外人を問わず，希望者が車を引き，縁者の女たちが哀悼の声を上げつつ埋葬に同行し，そして市の一番美しい国立墓地に骨を埋めたのであった。」(11) その後，戦没者の栄誉をたたえる追悼演説が準備された。ペルシャ戦争後のペリクレスの演説，コリントス戦争後のリュシュアスの演説，あるいはその後のカイロネイア戦争後のデモステネスの演説が知られている。そして大理石のとれる地方では，埋葬後の墓石の上にアポロンの如きクーロス像（青年の意味）が建てられた。

（2）精神の彫刻

ギリシャ人の彫刻は，神々の具象化の内的欲求に根ざしていたものである。したがってその意味では宗教的であったといえる。しかしその作品の自由性は，制作意志の自由性を意味し，彫刻の制作者たちは，宗教的束縛を遙かに超える霊感，すなわち神々の世界の新たな創造という芸術的な霊感に突き動かされていた。それらは，翼をもつ人間（ニケなど）やケンタロウスに表現されている。彼らは，もはや古い時代の彫刻を美しいと考えることができず，それらに満足することも出来なかった。さらに重要だったことは，彼らにとって，彫像する身体と心と別ものはなく，身体は内面的な表現であると信じていたことである。「霊魂と身体とは互いに共感しているように思われる。霊魂の変化する状態は，身体の形態をも変えて

しまい，また逆に身体の変化する形態は，霊魂の状態をも変えてしまうであろう。」(12) つまり，彫刻を制作した「芸術家たち」は，人間の身体の刻むことによって，その内面を表現し，精神を彫刻しようとしていたのである。「彫刻においては，精神の唯一の，そして自然な表現は，人間の肉体である。…ギリシャ人は，一切の精神的なもの，すなわち神々，人間たち，抽象的な特性，その土地の固有の事柄，自然現象等々を無数の人間の姿をした形成物にして表現しようという，不断の，そして無限に豊かな努力を行った。」(13) 神殿はいう及ばす，アゴラ（広場），柱廊（ストア），劇場や競技場あるいはギムナシオン（体育場）の至るところで，彫刻が見られた。「一切をある一定の人間的形姿内において完成させ」(14) ようとする思いに駆られたギリシャ人にとって，「主導権を握っていたのは絵画ではなく，彫刻だった。」(14)

多くのアルカイック（BC.700 ～ BC.500 頃）の様式の裸体静止像（クーロス）は，「死者（戦死者：引用者）の像として，つまり本来は墓上の肖像もしくは聖域の捧げ物として建てられたもの」(15) である。それは彫像性に優れた大理石で作られ，常に左足を前に踏み出し，ときには 3m を超え，ほとんどアポロンの姿に近かった。「何ももっていない両手だけがそれをアポローン像と区別する。」(16) 戦死した戦士が，戦いの渦中に示した勇敢なる精神と行動を，誰もが神々に等しい高貴なものと受け取っていた。「死者の英雄化のすべての根底には，人間を際だたせるあらゆる力，つまり勇敢や決死の覚悟や，支配者にふさわしい人格，神聖の表れとしての創造的叡智と美に対する畏敬の念が存在しているのである。」(17) クーロス像には故人の人間像であるにも拘わらず，個的な表情はほとんど表れない。それは彫刻の目的ではなかったからである。すなわち，そこに誰が葬られているかということではなく，戦いへの勇気が現存したということが重要なのである。のちのオリュンピア祭などの優勝者を祭った個性化していった彫像も尚，主題はいかにその個人に似ているかということではなく，その人間が為した瞬間の永遠化である。この意味で，「ギリシャ人は彫刻芸術の中に，肖像概念を一切所有しない。」(18) この彫刻の没個性は，ポリスのために生命を捧げるというポリス市民のもつべき普遍的な精神の具現であり，刻印であったからである。これらの彫刻は「完全なリアリズムを捨て去って，少なくとも不変なものをよすがとしていた…この芸術の次の使命は神々の姿を形づくることであった。」(19) ギリシャ人は「神々の心理的干渉」ばかりではなく，身体の様々な様態，すなわち，骨や筋肉，あるいは腱や靱帯の関連や動きの構造にも神々を感じていたはずである。「神々の姿を眼の当たりに見たいというギリシャ人の願望」(20)，すなわち神々の具象化への願望は，ギリシャ人の心的現象の表現として造形芸術を高めた原動力であり，今日の私たちの概念における「芸術」となったのである。「ギリシャの芸術作品は…きわめて宗教的であり，宗教的理念に支えられかつ貢献し，またそれらをかなえるもの」(21) であった。しかし，それは宗教的ではあっても，けっして宗教的な束縛に捕らわれ



発達した（大）臀筋と大腿筋（外側広筋）をもつ後期アルカイックのクーロス像：BC.530年頃、アテネ・国立考古博物館・大理石 高さ194cm、アナヴュソス（アッテカ）出土、1936年。墓碑銘曰く“道行く人よ、立ち止まって嘆き悲しんでくれ、戦場の最前列で、軍神アレスに命を召し上げられた、このクロイソスの前で”（世界美術大系全集「エーゲ海とギリシャ・アルカイック」P.306、水田徹、小学館）

た固定的あるいは不自由な形姿ではなかった。「ギリシャ人の場合は…エジプト人と異なって，神々の像を全部同じものにしてしまうことはなく，むしろ同一の神が，…様々な大きさ，様々な材料，実に豊かな姿勢，身振り，衣服，年齢段階をとって作られていた」(22) し，そのことによって，ギリシャ人は「神々の世界を新たに創り上げているのだという確信」(23) を持っていたのである。

クーロス像もエジプト芸術の影響を強くうけている。しかし「エジプトの石像は，…安定を保つために背後の柱や壁から決して離れることなく，前に踏み出された左足も自由にされず，石の中で背後の柱と結合されたまま」(24) である。一方，ギリシャの青年像（クーロス像）は，エジプトの彫像が神殿の壁を背にした浮き彫りであるのに対して，壁から解き放たれた完全に独立した「人間」である。しかも，エジプトの男性像が腰布を付けているのにたいし，ギリシャのそれは裸身であった。裸身はギリシャ人にとって「日常を離れたもの，祭礼的なもの，崇高なもの，神聖なもの」(25) と考えられ，オリンピア祭などの競技もまた裸身で行われた。オリンピアの競技は裸体に大量の香油を塗って行われ，またその勝利の報償も香油であった。裸体を誇示する文明は特殊である。「自然のあるがままの人間の姿が価値を認められるというこのプロセス」(26) は，身体の具有するなにものも隠蔽しない裸体を，「肉体の統一性のいかなる部分も，表面として目に見える極限にまで到達」(26) させているのであって，ギリシャ人は，このような精神が宿る人間の身体に価値を認めてきた。そこに神が佇むからである。個々の立像は，周りの環境や神殿の構成原理に貢献するのではない。「自由に佇むアポローンは，何かに役立つのではなく，支配する。そのプログラムは彼自身である。」(27)

エジプトの彫刻のように，壮大ではあっても壁に打ち付けられ自由を失ったものとは異なり，空間を占有することでリアリティーを増し，人間の触覚までも刺激する彫刻は，解剖学的難点などとは無関係に，そして神殿を初めとする建物以上に，ギリシャ芸術の極意である。ギリシャにおける人間の身体は，その中に神的なものを見，自然（ピュシス）としての単一で統一的秩序としての世界の神性という理想の形姿となって出現する。クルツイウスは述べている。アルカイック様式の青年の裸像における「同じ芸術的形姿が，あるときは人間を，あるときは神を表しうること，それも特定の神を，ギリシャ神話の巨大なパンテオンのなかでも並外れて霊的な神（＝アポロン：引用者）を表しうるというこの事実は，他のどんな芸術にも繰り返されることのない，ギリシャに特殊な驚くべきケースである」。(28) しかも，「神と人とのこの合流」(29) によって彫刻された像は，「人間」である場合には生きた人間ではなく，死んだ人間像であった。それは，まさしく「芸術は生の反照」(30) であったことを示している。「人間の美を神的なものと感ずる感覚を前提」(31) とした身体は，神と極めて近似したものであり，世界の精神を宿すものに違いないのである。エジプトのスフィンクスのように「大地に水平に縛りつけられている獣とは異なる直立した姿勢の人間こそ，存在の本質に不可欠となれば，これほど生命力に溢れ，これほど実存的な像は世界に一つもない。」(32) ギリシャ人の残した身体の造形が，身体そのものの再現のためにではなく，かれらの精神の彫刻であることに気付く。

古代ギリシャの彫刻が私たちを魅了するのは，そこに刻印された精神性のためであり，造形のリアリティーそのものとは異なっている。素朴なアルカイック時代から古典時代にかけてのギリシャ彫刻家の感性は大きく変動している。それは理想像の彫刻から次第に個性を表

現する彫刻へと発展していった。しかし初期の無名の彫刻家による素朴な彫像に秘められた精神性と，フィディアスやポリュクレイトスの作品のように，古典期の極めて均整のとれた造形性に現れているギリシャ人の美的感性は，私たちを魅了する限り共通のものを持っている。神と密接に関連した概念的存在として生きていたギリシャ人にとって，身体は個別化された肉体を意味せず，それは人間の魂を包含し，人間の魂の中には，神々が具現していた。「人間のなかに神的なものを認める考え方が，ギリシャ精神にどれほど深く根づいていたかは，神話の英雄のみならず，さまざまな功績を上げた，さまざまな身分の歴史上の人物を英雄化した無数の事例によって裏付けられる。」(33) 多くの人間が英雄となった。ホメロス，テルモピュライで全滅したスパルタ兵士，医師のヒポクラテス，悲劇作家のソフォクレス，詩人ピンダロス，そしてオリュンピア競技の勝利者，とくに戦車競技の優勝者達などが「英雄」となり，したがって列をなして作られた彼らの立像はまた，個性的ではあっても，神的なものを具現した比類無なき精神的，あるいは身体的な「神々しい」人間力への崇拝であり，その彫刻であったのである。にもかかわらず，上記の彫刻に抱くギリシャ人の概念の強烈さに比較して，「最も偉大な彫刻家と建築家さえ，ある種の社会的軽蔑にさらされていた。」(34) それは社会的俗業より遙かに優先する英雄精神の崇拝のためである。しかし彫刻，総じて造形芸術は幸福だった。「他のあらゆるものがおしゃべりのうちに雲散霧消していた時代にあって，理論や意見にがんじがらめにされた状態から解き放たれ，完全におのれ自身の道だけを歩むことができるという限りない利点を持っていた」(35) からである。

私たちは，次のことを想起する必要がある。彫刻に限らず，古代ギリシャが到達している文化的，芸術的水準は，新幹線や，飛行機や，コンピューターなどのいかなる現代的な科学技術発展の背景なしに可能であったということであり，さらに現代の芸術が，ギリシャのそれを遙かに凌駕していると主張することも困難であるということである。「ある民族が科学の分野においてゆるがせにしていたものは確実に他の民族もしくは他の世紀によって埋め合わされるが，一方芸術と詩文芸は，絶対に二度と取り返しのきかないものをまさに一度だけ成し遂げる」(36)。芸術的水準は，その時代のその民族の固有のものであり，二度と現れることはなく，再現されることもない。

（3）英雄精神の土壌

アイデンティティは，社会の慣習の中で生きる人々の中に醸成される自己の存在に対する多層的な価値意識であり，所属意識である。多層的というのは，個々人は，意識せずして次元を異にする複数のカテゴリー集団に属し，各々の集団はそれぞれ固有のアイデンティティを持っているため，個人のアイデンティティは，これらの複合的なものとして構成されているからである。ギリシャのどのポリスに属し，男性か女性か，自由人であるか，奴隷であるか，貴族であるか市民であるか，あるいは職業は何かなどいう，一人の人間が生きていく過程で重畳する複数の集団的アイデンティティの総合である。誰一人として単一のアイデンティティに生きる人はいない。しかしその多層的なアイデンティティの形成においても，その社会が何を求め，何に向かっていたかということは，それに与するかしないかにかかわらず，極めて重要なアイデンティティの要因となる。その社会のアイデンティティには，社会が求めた，あるいは社会が醸し出す理想が概念として埋め込まれている。この意味で，その

社会が孕む倫理的，道徳的理想像としての集団のイメージは，アイデンティティの内実を知らしめるものである。

ギリシャ人は，英雄への憧憬を抱き続けたが，しかし「英雄神は決して人類の理想ではない。」(37) 最高神ゼウスでさえ，人間世界にあっては非難される多くのこと－姦通，裏切り，騙し－を平然として実行する。換言すればギリシャ人にとって道徳的高潔性が信仰の重要な鍵であった訳ではなった。そればかりか，ギリシャ世界にあっては，今日的な道徳的倫理性は極めて希薄である。自らのポリスが他のポリスの人間に対し，殺戮や強奪，奴隷への強制など数々の悲惨を強いたとしても，それは奨励されることではなかったが，弱肉強食は自然の成り行きと受け止められ，何ら倫理的にギリシャ人の良心を傷つけるものではなかったのである。ギリシャ人が，神話の中に生き生きとした英雄神を想起しつづけたのは，これらの世界に生き抜くための名誉心，勇気，そしてその溌剌さのためである。アキレウスは，恋人をアガメムノンに奪われて海岸で独りオメオメと泣くかとおもえば (38)，トロイアの戦場にあっては，無敵の強さを示現する。殺戮のあまりの激しさに，「トロイヤ勢から遠くへ退(の)け！」(39) というアポロンの声を無視するばかりか，「あの傲慢なトロイア人風情に味方されて。あなたは以前にも，私をたぶらかして，戦闘から遠ざけられた」(39) といって反駁し，あまつさえ死を予期しながらも，「しかし今は遠くへ退かれよ。」(39) と神アポロンに向かって言い放つのである。踝(くるぶし)をパリスの矢に射貫かれて，黄泉の世界にいってもなお，アキレウスの亡霊は生に固執する。「命のない死人の王となるよりは，生きて，暮らしの糧もあまりない土地をもたぬ男の農奴になりたい」(40) のだと。すなわち，ギリシャ人は，神話を自ら生きる糧として創造したが，それによって常に再生産し，あるいは再認識しつづけたのは，人間としての生であった。

ペルシャ戦争において，テルモピュライで全滅したレオニダス麾下 300 名のスパルタ戦士は，自分たちが壊滅することを予期していた。しかして彼らが後に，神にも等しいがごとくに英雄化され，そして今日の私たちにおいても語り継がれるように，ギリシャ人は英雄になることを知って，ポリスのために「死ぬ」ことができたのである。「死者の英雄化すべての根底には，人間を際だたせるあらゆる力，つまり勇敢さと決死の覚悟や，支配者にふさわしい人格，神性の表れとしての創造的叡智と美に対する畏敬の念が存在しているのである。」(41)「饗宴」の中でプラトンはディオティマに語らせる。「人間は有名な人となり，“不滅の名声を永遠に打ち建てる”ことへの恋心のために，どんなに異常な心理状態になるか…。そのためには，…どんな危険をも冒し，金銭を費やし，いかなる労苦にも服し，さらにはそのために命を捨てるということを。…不滅の徳と，…輝かしい評判のために，人はどんなことでもするのです。しかも立派な人物であればあるほどそうなのです。なぜなら，人は不死なるものを恋い求めるからです。」(42)

「英雄的理想がギリシャ人の間に消えずに残った理由の一つは，この理想が都市国家に対する市民の奉仕と結びついたことにある。」(43) ポリスとは，市民にとって誇りとする郷愁の故郷ではなく，「より高次の，神的威力を備えた存在」(44) だった。市民は，「いったん戦争が起こったときには都市のために生命をなげうつ義務があり，しかもなお人はおのが生命をなげうつことによって『養育費』を都市に返済しているにすぎないのである。…最も功績あるものですら，故国が彼に負っている以上のものを，彼は故国に負っているのである。…ミルティアディスやテミストクレスではなく，この父祖の都市が，マラトンやサラミスの戦

いで勝利を得たのである。」(45)「死すべきもののうちに，不滅の栄光を選びとる」(46) 機会とは，ポリスの存続を賭けた戦争にあった。すなわちこの地上で死すべき人間にとって，不滅の栄光と名誉を手に入れることは，自分には固有の価値があり，人をして知らしむという願いと等価であった。そこには個人で完結する生に対する思想は微塵もない。その栄光は他者によって評価され，時代を貫いて語り継がれ，継続する。一方，不滅の栄光であるためのは，その行為が，人々から賞賛されるべき行為である必要があった。したがって単なる勇気ばかりでなく，その英雄的行為は，「正しい」ものであらなければならなかった。その正しさを許容し，あるいはその根拠を与えたのは，汚名を雪ぎ，名誉を回復するための「復讐」である。「名誉の観念は，自尊心が傷つけられた時の英雄的生き方の過酷さを一段と強め，英雄としての自負にかかわるような危機の際には，行動を愛する精神が暴力に化するのを助長した。」(47) かくして戦争は，ポリス市民としての戦争に果たすべき絶対的義務という拘束の中に，同時に，名誉と不滅の栄光を獲得し，英雄となるための絶好の機会を提供しつづけたのであり，このためにこそ，ギリシャ人は，ポリス間の戦争を止めなかったし，また止めることができなかった。

（4）アレテー（αρετε）とカロカガティア（καλοκαγατηια）

アリストテレスは，政治学の冒頭で国家を定義する。「およそ国家というものは共同体の一種であり，…すべての共同体は何らかの善を目標にするのであるが，それらのうちでも最高の共同体，他のすべてを包括する共同体は，あらゆる善のうち最高の善のために，最大の努力をもってそれを目指すのである。これが国家とよばれるもの，すなわち国家共同体に他ならない。」(48) アリストテレスのいう最高善とは，当然のことながら社会のアイデンティティを形成する概念である。「ホメロス的人間の最高善は，平静な良心の享受ではなく，ティーメー（社会的尊敬）の享受である。」(49) そしてこれらの人間が目指す最高善を決定する主要な背景は，社会の習慣（ノモス）であった。王位を剥奪されてペルシャに亡命したスパルタ王デマラトスが，ギリシャ人がノモスを懼れることは，ペルシャの民がその専制政治を恐れる以上のものだとクセルクセスに応えたように (50)，「ギリシャ人はポリスの共同的法，すなわちノモイ（ノモス）を道徳的，創造的力と考えた。」(51) 自己の死を予感しながら，それでもアキレウスとの戦いに駆り立てられたトロイアの総大将ヘクトールは自戒はする。「ワレ，トロイアノヒトビトヲ惶(おそ)ル。」(52) それは，トロイアの人々に犠牲を強いた戦争の責任者の一人として，逃げてはならない果たすべき義務でもあった。かくして，ノモスはギリシャ人にとって，「個人の上位にあり，またそればかりか共同体よりも上位にあった共同体の生活を規制している客観的な秩序」(53) であった。詩人ピンダロスにおいても，「死すべきもの，不死なるものを問わず，すべてのものの王たるノモス」(54) と位置づけられ，「この概念には，何か畏敬の念を起こさせるもの，ある程度神聖化されたものが宿って」(54) いたのである。ギリシャ人がポリスを守るというとき，そこには城壁や自らの生命とともに，彼らの生命を意義づけていたこのノモスへの殉教が含意されていた。

ノモスが要求する理想的市民像は，「農耕作業にすぐれ，民会の演説には説得力があり，国事につけば正直にやり抜き，将軍となれば判断が正しく，用兵にも長じ，音楽にも体育にもすぐれている」(55) という男性像である。身体能力の開発は，それがどのレベルであった

としても，「蹂躙されまたは征服されたくないという欲望」をもつポリス防衛のもっとも重要な軍事的要素であった。一方で，迫り来る眼前の国難に対して，幾度も神託を伺い，その神意を知ろうとしたように，彼らは，運命を司る神々を信じ切っていた。戦闘における勝敗については，つまり勝っても負けても，それは神々の意志であると彼らは受け取った。パトロクロスの仇討ちに燃えるアキレスに討たれる前のヘクトールは叫ぶ。「ゼウス神もゼウスの御子の遠矢の神（アポロン）も，こうなることをお望みだったか…今度は私を，死の運命が襲おうというのだ。」(56) つまり「聖なる価値をもった神の裁定を得ようとして，勝つか負けるかという試練を受けること，それが戦争なのである。」(57) その試練に向かう人間にとっては，勝敗そのものが重要なのではなかった。なぜなら勝敗は神が決定したからである。したがって勝利とは，強いとか他者を征服するということを意味するより以上に，それに対峙した人間にとって神意に叶ったこと，すなわち「正しい」ということを含意するものだった。しかし，勝敗を神が決定するからといって，何もしなくてもよいということにはならない。かれら自身にできること，それは与えられた力を存分に発揮すること，とくに求められる理想像としてのアレテー（卓越性）を示すことによって裁定は下る。「アキレスに敗れたヘクトールがそうであったように，不具になり，傷を負い，殺され，これ以上は戦えないというほどまでに全力で戦ったならば，たとえ負けたとしても，それは不名誉ではなかった。勝つか負けるかは神々の手に委ねられていた。不名誉であり，恥ずかしいことは，勇敢さや忍耐力を十分に示さず，勝者に屈してしまうことであった」(58) のである。したがって「オリンピア祭競技のボクシング，あるいはレスリングの試合の一つで殺された少年や大人が勝者としてしばしば栄光を与えられて，自分の属する親族や都市の名誉になった。」(58) この意味から，ギリシャ人にとって，生命は生きるか死ぬか，という場面で賭けられるのではなかった。生存への戦いというとき，そこにはすでに生きることが前提として選択されている。しかして生命を賭けた戦いには，神の意志を聞き，神の意志に従うという神聖な態度が存在していたのである。

ギリシャにおけるアレテー（αρετε, virtue）という“ことば”は，人間に限ることなく，神々によって授けられた様々な性質や機能の優れた特性や卓越性，あるいは優良性というものを意味するものであった。 のちの（ソクラテス以後の）アリストテレスにとっては，卓越性は人間の卓越性であり，しかも「身体の卓越性ではなくして魂の卓越性」(59) だった。彼はアレテーを知的卓越性（ディアノレティケー・アレテー）と倫理的卓越性（エーティケー・アレテー）に分離し，この後者の倫理的卓越性が，後代の「美徳」の意味へと進展した。しかし，それ古代のポリス社会にあって，アレテーとは極めて独特で，かつ重要な概念だった。「実際それは『美徳』という言葉が指しているような道徳的特性などには全く触れていなかった。それはとりわけ身体のイメージ，強くて武芸に長じた戦士としての特質が重要な役割を果たしていた戦士や紳士の身分に到達することを意味していた」(60) のである。

アレテーは，政治的な権力が市民に拡大していく過程で，その権力を奪われ，脆弱化していく貴族層の精神的理想像として成長した。旧来の座を追われていく支配階級であった人々が，その人生の目標にしたものが，同輩間での競争であったし，その中で自己の存在価値を示す概念として肥大化していった。「常に最高の勇者たれ。常に他を凌駕せよ」(61) というアキレウスの父ペーレウスの言葉のように，アレテーはとくに戦闘における勇敢さや卓抜な身体的能力，すなわち価値ある行為を意味していた。したがってそれを目指し，実行可能と

するために鍛錬によって自己を磨き，健全で逞しい身体的能力を持ち，戦闘において他者よりも優れた存在であることを目指す克己精神と結びつき，それらを奨励し，かつ鼓舞する能動的概念として市民の間にも浸透していった。ギリシャ人たちは競技を通して身体を鍛錬し，ポリス間の生存の根源的な戦いの勝利と生還に備えた。それは，ポリスの繁栄を目指して戦闘に備えた市民の体現すべき志向性となり，さらに広範な概念として成長していく。「人間はこの種の身体の鍛錬の中で，自分の自由を表しているのであり，その意味，身体を精神の器官に改造しつづけたのである。」(62) しかしおそらくもっとも重要だったことは，「ポリティケ・アレテー」として，共同体の課題が要請する政治的能力が重要視されていたことである。ポリス的市民としてのアレテーには，壮健な身体が帯びていた社会的意義と連動し，「組織的な社会の存立を可能にするものであり，また際だった程度にそれを所有するものがあれば，そのものを政治家として成功させるような性質」(63) が含意されていたのである。「人間の目的は国家に対して有能であることであり，この特性を余すところなく具えている者のみが市民に値するということは，スパルタ以外の国においても，少なくとも市民階級の理論」(64) だった。

このアレテー概念は，ホメロス以降のギリシャ人にとって多様な側面に敷衍化されていった。ギリシャにおける英雄は，今日的な意味で道徳的である必要はなかったが，アレテーは道徳的な観点にも拡大し，「美徳」や「公正」の性質を包含するようになり，男性としては，「勇気」や「度量」であり，戦士としては，優れた武技，武人の技量としての勇気，節制，正義（ディカイオシェネー）の性向を含み，精神的にも健全で節度正しく，知能や弁舌に優れ，かつ美しいものを愛する性格や性質を意味し，また政治家としては，卓越した弁論や政治的リアリズムを認識した策略家としての知謀をも含意するようになった。さらに女性においては，編み物の技術などの家庭を取り仕切る種々の能力，あるいは節操や貞潔をも意味するようになった。このようにしてアレテーの概念は，望まれる市民が具現すべきアイデンティティとしての肥大化し，ポリス社会において有為な人物であるための総合的，全人的能力を意味するようになっていった。この全人的，全人格的志向性は，BC5 世紀後半以前のギリシャ的精神の最も重要な確信の一つである。「いかなる特殊能力も人間を単なる部分となし，したがって俗業的に（卑賤に）にする。」(64) すなわち「ギリシャ人は，もしその人に何らかのことをなす能力がある場合には，欠けるところのない一つの全体であろうとした」(64) のであり，「人間は或る広大で包括的な機構の一部をなすという」(65) 信念のうちに，「慰めと励みとを感じた」(65) のである。

古代ギリシャ人にとって，アレテー（卓越性）とは，人間社会の，つまりはポリスの生存と繁栄に責任をもとうとする自由市民が備えるべき必須のアイデンティティであったと考えられる。「ギリシャ人が音楽や詩や体育の競技をことのほか好み，オリンピア競技をはじめとする民族的祭典をつくりだしたのも，市民としてのアレテーを練りあげるためであった。」(66)「ギリシャ…の社会は，共同社会に対する個人の服従，国家に対する市民の服従の観念のうえにたてられていた。それは国家の安寧を，この世においても来るべき世においても，行動の窮極目的として個人の安寧のうえにおいた。市民は幼少の頃から，この没我的理想の中に訓練されたので，公共の奉仕にその生命を打うちこみ，公共の福祉のためにそれを犠牲とする準備をもっていた。」(67) この目的を認識していたがゆえに，ギリシャ人はアレテー（卓越性）にいわばポリス社会の存続の理想像を込めた。のちの個別宗教が，その諸戒律に

よって悪を禁じたのに対し，アレテーは最善を尽くすことを鼓舞し，また奨励したのである。そのアレテーを賦活していたものは確かに神々しい「英雄」という概念であったが，同時にそれを目指すギリシャ人の退路を断つように，彼らを駆り立てていたのは，名誉や名声の背後に存在していたノモスに起源する「恥」という概念であった。「ホメロスによって描かれた社会は，明白に恥の文化に属する…。彼らの最高の道徳的強制は，神への怖れではなく，社会的評判への顧慮（アイドース）である。」(68) 恥は，公共的制裁の個的表現であり，公共的精神が，個人の内部に形成させる一つの道徳的強制である。この本源的な道徳的強制である恥を甘受し，あるいは耐え忍んで生きながらえることは，強いゲマインシャフト的社会ではほとんど困難である。一方でこの概念は，英雄という概念と表裏一体をなして強力に結びつき，人をして没我的犠牲を強いるいわば「殉教者」的群像を産み出す。それは我が国の「特攻隊員」やイスラム社会における「聖戦（ジハード）」に身を捧げる若者のように，生命を賭して国家的あるいは社会的理想に殉じようとする自発的犠牲者，あるいは社会の名による被強制的犠牲者を産出する精神構造でもある。しかしながら，他者の存在によって初めて実態化し，現実化するポリス的人間は，そのゲマンインシャフト的人間関係の中にこそ，生命の意義を認め，社会的尊敬を前提として，仲間の期待や予想を裏切る不名誉もしくは恥の概念の窮極的な対局に，「英雄」という概念を培養し，英雄を目指す弛まぬ人間的努力として，アレテーを要求しつづけたのである。

アテナイの民主政の発達の過程は，ポリスを支える歩兵としての市民が，貴族的特権集団の権力を削ぎ，市民の政治的価値を高めていく過程と符合する。とくにクレイステネスの改革によって，それまで世襲であったアレオパゴス会から裁判権や役人の任命権を市民が奪ったことは決定的だった。脆弱化していく政治的権力や発言権に直面し，政治を自由に左右することが出来なくなった貴族階級は，政治権力を譲り渡す過程で，むしろ，内部的，精神的世界において人間的優秀性を求めるようになっていった。現実の政治的野望を人間的な完成に求めるようになったときの概念がカロカガティア（Καλοκαγατηια, Kalokagathia）である。したがって，カロカガティアの起源は貴族的である。カロス（Kalos）は美しいこと，高貴なことを意味し，人間の性格的あるいは精神的な高貴さというよりは，高度な身体的能力をもたらす美しさや優雅さ，動きの美的調和を意味していた。「そして」を意味する kai の後に，善いこと，あるいは卓越していることを意味するアガトス（agatos）が続く。このアガトスは，有徳の（virtous），理知的な賢さ（rational）や利発さ，勇気（prowess），そして公正さ（justice）を意味していた。すなわちカロカガティアは，ブルクハルトが指摘するように，「道徳的確信，美的確信，そして物質的確信がまったく分離しがたく融合して一つの概念になったもの」(69) で，最早カロカガティアを単一の現代語に翻訳することはできない。「貴族支配が終了し，新しい段階の社会，政治的発展が始まったことによって，貴族の身体文化を他の層に適用することが可能となった。」(70) 身体的能力と精神的あるいは人格的高潔さの一体性の中に，完全なる美しさと高潔な善を求めようとするカロカガティアの精神は，図らずも，人間的に完成しようとする崇高で優れた内発的精神性のために市民を魅了し，この概念は多くのギリシャ人に，到達すべき理想像として普及していった。カロカガティアは，身体的修練と精神的修練の密接な平衡と協調の調和を理想像とする概念であり，まさに人間の完全なる発展を展望する核心的概念となった。換言すれば，種々のアレテーのなかでも，カロカガティアは，人間が追求すべき生存の理想像を示す指導理念であると同時に，到達す

べき完全な人間的発達の表現といってもよい概念であった。しかし，カロカガティアの理想像の体現は，恵まれた教育環境が保障されなければ到達できるものではなかった。それほどに豊かではない多くの市民は，カロカガティアに憧れたかもしれないが，十分な余暇を使い，高価な医師兼体育教師をトレーナーとして雇い，体育の教練やあるいは音楽や詩の教育を子弟に準備することは，できないことだった。逆に言えば，カロカガティアを体現し，かつ有名であることは，人から羨ましがられることと，表裏の関係にあった。富裕な人々は祭祀や戦争に際して多大な費用を拠出し，ポリスに貢献することこそ市民的義務と考え，またそのように行動してきたが，民主制のアテナイでは，有力な人材は政治行政的役割から遠ざけれる傾向にあった。同時に，そのような有能な人材を生み出す富裕な家系の人々が示すある種の傲慢さは，やがて羨望を超えて，富裕な有力者への潜在的な反感や妬みとなり，有能な人材の追放や告訴となって，政治世界の混乱を助長する要因にもなった。その意味で，カロカガティアは，その概念の起源であるところの貴族的血統への「信仰」を最後まで払拭することは出来なかったのである。

（5）アルキビアデスとソクラテス

カロカガティアを体現し，かつアテナイの没落と命運を共にした一例はアルキビアデスである。彼は，見目麗しく壮健であり，「それが少年，青年，壮年とあらゆる時期を通じて花とひらき，ひとの心をなやましくほれぼれとした気分にひきづりこんだ」(71)。彼の父はアルテミシオンの海戦でペルシャ海軍を撃破したクレイニアスであり，その父がコロネイアの戦いで戦死した後は，アテナイ民主制の象徴ともいわれる叔父のペリクレスが後見人の一人となった。つねに公民派を代表し続けたアクマイオンの名家系をもち，市民には不思議な人気を維持しつづけ，同時に彼自身も富と名声欲を渇望しつづけた。「その美貌，慣習にとらわれない性格，堂々とした態度や話し方，趣味のよい髪型や服装に，人々はすっかり魅了されてしまった。」(72) 一方で，ソクラテスとともに「食事をし，レスリングをし，またおなじ陣営のテントに寝とまり」(73) したばかりでなく，BC.432 年のポティダイア遠征には一緒に従軍し，ソクラテスに守られたり，BC.424 のデリオンでの敗走の折りには，ソクラテスを守ったりしている (74)。彼はソクラテスを「若者たちに心をくばり，これを救う神々の配剤」(75) と考え，彼が「うやまい，おそれたもはソクラテスただひとり」(76) であったと言われる。ソクラテスを告発した中心人物のアニュトスは，アルキビアデスに思いを寄せていたが，アルキビアデスから極めてぞんざいな扱いを受けている。アニュトスがソクラテスを告発した伏線には，このことがあったのかもしれない。(77) プラトン描くアルキビアデス自身は，ソクラテスに対するアンビバレンツな心情を吐露している。「この人（ソクラテス）の話しを聞くごとに，…はるかに激しく僕の心臓は動機を打ち涙は流れるのだ。…僕は，この人にだけは恥しいという気持ちになるのだよ。…それで僕はこの人がこの世にいるのを見ないことになったらどんなにか嬉しいだろうかと思うことがしばしばなのだ。とは言え，逆に，もしそんなことが事実となったら，ぼくはそれより遙かに大きな苦しみを感じるだろうということを，よく知っている。」(78)

アルキビアデスには，快楽や欲望が人一倍であったと伝えられ，市民の人気と警戒感が交雑していた人物だった。「アルキビアデスの献金，コーラス隊の後援，町に対する比類のな

い気っぷのよさ，先祖の名声，弁舌の力強さ，体つきのうつくしさ，たくましさ，その上戦争経験のゆたかさと武勇には，アテナイの町衆はまいりこんでしまったので，その他のことは一切大目に見て事をあらだてようとはしなかった。」(79) BC.416 年のオリュンピア祭の戦車競技では，7 台の戦車を出場させ，1,2,4 位を独占した。この時代に戦車競争は，4 頭だてであり，馬の飼育，調教師，御者，戦車の準備，競技への参加を含め巨額の財力を要し，極めて富裕な貴族だけしか行えない競技だった。無論アルキビアデスが御者であったわけではないが，栄冠は戦車の所有者に帰せられ，当然にも，栄誉に連動した政治的な発言力は増した。この頃，アルキビアデスは，シケリア遠征に沸き立つアテナイ市民を煽り，遠征に反対し市民の決議に不承不承ながらにしたがった将軍ニキアスとともに，自らも将軍として大船隊を率いてシケアリに遠征した。トゥキディデスはアルキビアデスを酷評する。彼は「遠征軍の指揮官職につきたかったし，またシケリア島とそれを通してカルケドーン（カルタゴ）を押さえて個人の富をふやし，自己の名声を得ようとしたのである。…」(80) しかし彼には，のちのアレクサンダー大王を先取りするかの如く，シケリアのみでなく，今日のフランスやスペインまでの支配という広大な展望があった。その構想が「実現していたら，人類の歴史は根底から変わっていたことだろう。」(81) デロス同盟の軍資金が流入し，種々の手当を目当てに堕落した BC5 世紀後半のアテナイでは，検察制度不在のもとに訴訟が頻発し，訴訟による勝者からの報酬，あるいは被告からの示談金など，告発そのものが利益を引き出すという理由で，多くの誣告者（シュコパンテス）によって有力者に対する様々な告発がなされていた。そのような状況で，アルキビアデスらのシケリアへの出発の前夜ヘラス像破壊事件（ヘルメス事件）が起る。(82) アルキビアデスはシケリア遠征に出発した後に，この嫌疑をかけられることになる。シケリア遠征中，高速特務船サラミニア号が罪状を伏せたままアルキビアデス召還のためにシケリアに来た。検察官も人権もない当時にあって，身の潔白を証明する手だてがない個人にとって，アテナイの決定は絶大だった。この召還が処刑という断罪に連なることを察知した彼は，召還される途中に自艦とともにペロポネソス半島に上陸して逃亡し，敵国スパルタに庇護を求めた。スパルタは，アテナイにおいてスパルタの保護役（プロクセノス）でもあったアルキビアデスの能力を知っており，これを受け入れ，一方アテナイは欠席裁判によってアルキビアデスに死刑を宣告したのである。

アルキビアデスは，訴追された祖国アテナイの攻略のために，スパルタに対し，シュラクサイ（シケリア）を援助すること，さらにアッティカの要衝であり，アテナイ攻略への要衝でもあったデケレアへの出兵を勧奨した。スパルタを利するこれらの行為は，後生の悪評を蒙る一因となる。しかし，祖国を「裏切った」彼は，このときラケダイモン（スパルタ）人にむかって，アテナイに刃向いスパルタを援助する気持ちを次のように伝えた。「私の愛国心は私を傷めた所にはあらず，安全に居住できる所にある。私は今や祖国に抗して挑戦しているとは思えず，失われた母国の奪還に赴くのだと考えている。真の愛国者とは，己に不正を働いた母国に刃向かうことを拒絶するものを指すのではなくて，望郷の念から，あらゆる手段を講して祖国を取り戻そうとする者のことである。」(83)

アルキビアデスの指揮を欠き，士気が低下したアテナイのシケリア遠征軍は，将軍ニキアスの迷信を重んじた優柔不断の判断 (84) と相まって，悲劇的に惨敗し，ニキアスとともに，もう一人の将軍デモステネスも捕縛されて処刑された。捕虜となった歩兵たちは，谷に幽閉され，炎天下に十分な水も食糧も与えられないまま，7,000 名の兵士が 8 ヶ月間石切場に留

め置かれ，その後奴隷に売られていった(85)。シケリア遠征隊の壊滅は，アテナイにとってペロポネソス戦争敗北への里程標だった。そのために，アルキビアデスのスパルタへの逃亡と寝返り，その後のペルシャへの内通などの「背信行為」は，後世においてアルキビアデスの評価を貶めることになった。しかし，アテナイがアルキビアデスを断罪し，召還していなかったならば，アテナイはシケリアで勝利していたかもしれない。アルキビアデスは，その後，自分の子どもをスパルタ王にする意図をもって，スパルタ王アギスの遠征中，王妃との間に子どもを設けた。そのことを知ったアギスから暗殺令が出されたことを知って，アルキビアデスはペルシャに亡命せざるをえなかったが，彼はつねにアテナイへの関心を怠らなかった。というのも，アテナイでは BC.412 年に革命が起こり 400 人体制が樹立されたとき，サモスに集結していたアテナイ海軍兵士は，400 人政権打倒の反乱への機運が高まったが，アルキビアデスがこの勢いを鎮めて，アテナイ海軍と本国との内乱の危機を回避させたのである。

ペロポネソス戦争時の不安定な政治情勢だったアテナイは，今日からは想像できないほどの安易さをもって，多くの有能な人材を容易に死刑に処し，あるいは追放した。陶片追放は，一番嫌いな，追放したいと思う人間の名前を書けばよかったし，それは「刑罰ではなく，嫉妬心の慰撫・軽減」(86) に堕していた。ペリクレスも，自身が陶片追放される危険を侵して，ようやく政敵を追放できたし，サラミス海戦の立役者テミストクレスも，陶片によって追放された。(87) 一方で，「都市における一切に関しての最高の処分権と，それをなす権利を有するアテナイ人」(88) は，デュオニソス祭の際に，全員が規則的に宣誓することが求められた。それは「およそ民主制に反対するような者を殺害すること，特に非民主制体制下においてある地位を占めると思われるような者，並びに僭主との援助者すべてを殺害すること，その殺害執行者に無罪の宣告をすること，殺害された者達の財産を売却し，かつその財産の半分を殺害執行者たちに引き渡すのに助力すること，ハルモニデスとアリストゲインの子孫のような，殺害者の子孫に給与をなすこと」(89) などである。ペイシストラトスは別としても，それ以後の一家の僭主政治からの脱却の記憶が，アテナイ民主政の憲章神話となっており，有能な人材の排除に姿を変えて矛盾を拡大した。

アルキビアデスはアテナイから追放の身でありながら，追放中にも彼が指揮した自前の艦隊は多くの戦績を挙げた。全盛を誇った昔日のアテナイを再生させうる能力を有する残された人材として，アテナイの人々はアルキビアデスに期待し，帰国のために遂に BC.411 追放令を解除した。アテナイの様子を数年間注意深く窺ったアルキビアデスは，BC.408 晴れてアテナイに帰郷を果たした。「彼が入港すると，ペイライエウスからもアテナイからも，讃歎の念を感じつつアルキビアデスを目にしようと，人々が集団となって艦隊に群がってきた。彼らが言うには，アルキビアデスこそ最高の市民である，彼はただ一人不当な追放刑受けたのだ，だがそれは彼が，彼より行動力も弁論能力も劣った者たちや自己の利益ををはかって政治を執り行う者たちの陥穽にはまったためなのである」(90) と。しかし，アルキビアデスは，すでにアテナイに安住するができなかった。アテナイの人々は，このカロカガティアを体現した人間に，かつての輝かしいアテナイの再興を夢見て過度な期待をかけたのである。

艦隊を率いてエペソス沖に展開したアルキビアデスは，もう一人のアテナイ将軍トラシュブロスに会うために一時戦場を離れたが，その際「開戦するべからず」といって艦隊の指揮を部下のアンティオコスに委ねた。ところがアンティオコスは，アルキビアデスの指示を

破って独断で開戦し，結果として 15 隻の艦船を失うという事件が起きた（ノティオンの海戦）。アテナイの人々は，これをアルキビアデスの怠慢と放恣の責任であると見なして許すことができず，将軍職まで罷免してしまった。アテナイに失望したアルキビアデスは最早アテナイに留まらず，ケルネソス（現在のボスポラス海峡のヨーロッパ側）に作っていた要塞化した自領に逃避し，その後は要塞近隣の住民の安全を保る警護の役割を果たしたといわれる。アルギヌーサイの海戦はこの後に起こった。ソクラテスが反対したにもかかわらず，扇動者の言にそそのかされるままに，アテナイは遺体を引き上げなかった廉で将軍 6 名を処刑して人材を浪費した（この後アテナイはこのことを後悔した）。アテナイ人を，悲劇をもって鼓舞勉励したソフォクレスもエウリピデスもこの頃（BC.406）相次いで他界した。

暗澹とした不安がみなぎっていたアテナイでは，「賠償金と引き替えに解放した捕虜の多くが，反アテナイ陣営に復帰するのをみて，…捕虜にした敵兵は右手を切断すべしという法律を可決させ」(91)，このことがさらに反アテナイ陣営を激怒させた。BC.405 年，アテナイ艦隊は，アテナイの食料供給地でもあったアイゴス・ポタモイを確保するために，リュサンドロス率いるスパルタ艦隊と海戦を交えようとしていた。その投錨地はアルキビアデスの要塞の近隣であったために，アルキビアデスはわざわざアテナイ軍にまで出向き，指揮権を共有させれば援軍とともに加勢することを告げ，さらに投錨地が宿営地と離れている戦略的な不備を指摘し，投錨地を変えるよう忠告した。(92) しかし将軍たちはその提案を実行することがアルキビアデスの手柄になることを怖れ，アルキビアデスは「すでに将軍ではなく，指揮する資格はない」と言って提案も忠告も聞き入れようとはしなかった。しかして戦術なきアテナイ軍は，アルキビアデスが予想したように，スパルタ王リュサンドロスの艦隊によって急襲され，戦闘態勢のとれなかったアテナイ軍は惨敗し，結果的として，アテナイ市民を養う食料供給路を絶たれ，ペロポネソス戦争の帰趨を決する決定的な敗北を喫したのである。捕虜の右腕切断を提案した将軍ピロクレスは捕らえられ，「慣習に反した行為をギリシャ人にたいして最初にとった者は一体どのような罰に値するであろうか」(93) と糾問されたあと，斬首された。逃げ延びた高速特務船「パラロス号がアテナイに到着して，災禍（敗北）が報じられると，嘆きの声はペイライエウスから大城壁を通って，人から人へと語り継がれ，アテナイ市街まで達した。…その夜は，眠る者は一人とてなく，人々は戦死者を悼むだけでなく」(94)，これまで多くのポリスを攻略して強いてきた数々の無慈悲な殺戮が，今度は逆に自分たちに起きることを予想して，アテナイ人は恐怖におののき，また絶望したのである。この「海戦後直ちに全ギリシャがアテナイに対して叛旗を翻した。」(95) 陸海ともに包囲されたアテナイは，その後も引き続くスパルタによる兵糧攻めになお 3 ヶ月以上も持ちこたえたが，多くの餓死者をだして BC.404 年遂に降伏条件を申し出て，受け入れられた (96)。

戦争終結後，ペルシャ戦争の功績によって破壊と殺戮を免れたアテナイでは，スパルタの後ろ盾で 30 人寡頭支配体制が成立した。この悪名高い 30 人体制は，市民の武器を没収するとともに，国家を「掌握するや，市民のだれをも憚らず財産や門地や名声において秀でたものを殺し，自己の恐怖を除くと共に他人の財産を奪おうと欲した。こうして僅かの間に千五百人を下らぬ人々を殺してしまったのである。」(95) そのなかには，確かに，頽廃を招く誣告者も多く含まれてはいたが，首領のクリティアスは，「アルキビアデスが生きている以上は，アテナイ人をこのままじっとさせておきはすまい」(97) と，アルキビアデスを恐れ，スパルタをしてその暗殺を仄めかし，スパルタはペルシャの総督パルナバソスを介して

フリュギアに刺客の一団を送った。愛人ティマンドラとともに暮らしていた家に火を放たれ，剣をもって飛び出したアルキビアデスは，外で待ち受けていた刺客たちの槍や弓矢の集中を浴びて遂に絶命した。ティマンドラは，その遺体に取りすがって涕泣しながら，アルキビアデスの屍体を自分の衣でつつみ，その後メリッセという町に「手もちの金をはたいて，見事に花々しく…葬った」(98) という。ヨーロッパを駆ける大望を抱き，オリンピア祭の戦車競技で優勝し，また数々の輝かしい戦績をあげながら，一方で人々から妬まれ，愛してやまなったアテナイから追放されたアルキビアデスは，かくしてアテナイの没落とともに，かつ師と仰いだソクラテスよりも先に，波乱の生涯を悲劇的に終えたのである。のちのローマ皇帝ハドリアヌスは，このメリッセに大理石で造ったアルキビアデス像を記念碑として据え，毎年牝牛を捧げたという。(99)

アテナイの 30 人寡頭体制は，その後の内乱によって，トラシュブロスとアニュトス率いる民主政権によって倒されたが，その民主政権は，BC.399 年，若き日のクリティアスやアルキビアデスと親しかったソクラテスに，不敬罪（不信仰）と若者の人心攪乱の嫌疑で有罪を宣告した。自分に課された罰金刑を不当に過少評価し，助命や亡命の可能性を一顧だにせず，アテナイの堕落はまさに陪審員そのものであると言わんばかりに，陪審員の敵意を故意に煽りながら彼は自ら有罪を勝ち取った。刑死というよりは自殺ともいうべきソクラテスの死は，その結末が死でありながら，「人間はいかに生きるべきか」という精神的な生への明確な選択であることをはからずも鮮明にした。それまでのギリシャ人にとって，かつてアキレウスがその英雄的行為，言い換えれば身体的活躍によって獲得される栄光を選択したように，精神と肉体は分かちがたく結びついている一体であった。「アテナイ人がかれの『自己』について語ったとすればかれが意味していたのはかれの身体，ぬくもりがあって生きている意識の座としての身体だった。」(100) しかし，「ソクラテスが，…人生で心を配るに値する唯一のものは富でも社会的栄誉でもない，それは魂だと述べたとき」(101)，身体と一体であった魂は身体から画然として切り離されたのである。「真の自己とは身体ではなく魂」であると主張するソクラテスの死の影響は甚大だった。なぜならば，一人の人間の魂の完成という人生の目標を目指すことは，ポリスを支えていた身体と精神の土台を揺るがし，人々の魂はポリス的な協同性から離脱していくにちがいなかったからである。世界の原理を理解しようとした豊かなイオニア自然哲学の系譜を断ち切り，自らの思想的営為の無謬の確信と幸福感を朗らかに誇示しつつ，肉体に背を向け泰然と毒杯を仰ぎながら死にゆくソクラテスは，身体と精神が調和したカロカガティアというギリシャ的理想像の超克であるとともに，明らかにその終焉でもあったのである。

注釈

1．ポリスの特性

(1) HDF・キトー「ギリシャ人」向坂寛訳，P.107，勁草書房，1966年
(2) ibid, P.107
(3) ibid, P.103
(4) N・ベルジャーエフ「歴史の意味」氷上英廣訳，P.29，イデー選書，白水社，1998年
(5) 太田秀道「スパルタとアテネ」P.51，岩波新書，1970年
(6) HDF・キトー ibid, P.35
(7) CM・バウラ「ギリシャ人の経験」水野一・土屋賢二訳，P.11，みすず書房，1978年
(8) HDF・キトー ibid, P.37
(9) CM・バウラ，ibid, P.13
(10) 太田秀道，ibid, P.15
(11) HDF・キトー ibid, P.168
(12) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第一巻，新井靖一訳，P.108，筑摩書房，1991年
(13) HDF・キトー ibid, P.90
(14) ヘロドトス「歴史」（下）松平千秋訳，P.256（以下ヘロドトスについては巻－章（9-28）で示す）
(15) HDF・キトー ibid, P.91
(16) G.マレー「ギリシャ宗教発展の五段階」藤田健治訳，P.105，岩波文庫，1977年
(17) WKC・ガスリー「ギリシャ人の人間観」岩田靖夫訳，P.38，白水社，2007年
(18) トゥキディデス「歴史」小西晴雄訳，5-84，P.116，世界文学全集11，筑摩書房，1971年
(19) HDF・キトー，ibid, P.148
(20) CM・バウラ，ibid, P.45
(21) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第一巻，P.112
(22) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第四巻，新井晴一訳，P.95，筑摩書房，1993年
(23) CM・バウラ，ibid, P.15
(24) HDF・キトー，ibid, P.317
(25) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第一巻，P.233
(26) トゥキディデス1-70（巻－節）
(27) アリストテレス「政治学」牛田徳子訳，P.8，西洋古典叢書，京都大学学術出版会，2001年
(28) 太田秀道，ibid, P.25
(29) ibid, P.25
(30) アリストテレス「政治学」ibid, P.406
(31) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第四巻，P.173
(32) プルタコス「プルタルコス英雄伝（上）」村上堅太郎訳，P.90，ちくま学芸文庫，1996年
(33) CM・バウラ，ibid, P.21
(34) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第四巻，P.237
(35) ヘロドトス「歴史」7-102
(36) ibid, P.103
(37) ibid, P.104
(38) ヘロドトス8-144
(39) ヘロドトス7-139
(40) P・カートリッジ「古代ギリシャ人－自己と他者の肖像」橋場弦訳，P.250，白水社，2001年

(41) トゥキディデス「歴史」ibid, P.202（5-86, 5-89, 5-100）
(42) ibid, P.203
(43) ibid, P.202
(44) F・ニーチェ「ギリシャ国家」ニーチェ全集第二巻（第一期）「反時代的考察」西尾幹二訳，P.340，白水社，1980年
(45) HDF・キトー，ibid, P.125
(46) 太田秀道，ibid, P.92
(47) ヘロドトス，4-80
(48) V・オリボバ「古代のスポーツとゲーム」阿倍生雄・高橋幸一訳，P.102，ベースボールマガジン社，1986年
(49) スパルタ兵の中には国家奴隷も含まれていた（ヘロドトス8-25）,それ以外にデモピロス麾下の700名のテスピアイ人が残留した。一方この闘いのペルシャの犠牲者は4,000余人，そのなかにはクセルクセスの兄弟アプロコメスとヒュペランテスも含まれていた（ヘロドトス7-224）。
(50) プルタコス「プルタコス英雄伝（上）」，P.72
(51) HDF・キトー，ibid, P.125
(52) 太田秀道，ibid, P.81
(53) トゥキディデス，ibid, P.27（1-70）
(54) G.マレー「ギリシャ宗教発展の五段階」藤田健治訳，P.116，岩波文庫，1977年
(55) アリストテレス「アテナイ人の国制」村川堅太郎訳，P.278，アリストテレス全集17，岩波書店，1972年。「彼らは或いは不当に，或いは正当に奴隷に売られ，或いはやむを得ぬ事情で故国を棄て，諸処に流浪せるためにもはやアッティケの言葉を語りえなかった。」
(56) ibid, P.274
(57) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第一巻，P.293。平野党は富裕層からなりリュクルゴスが率い，中間層および職人を代表したのは海岸党であり，メガクレス（アルクマイオン家）が率い，貧困層を代表したのが山地党であり，ペイシストラトスがこれを率いた。
(58) アリストテレス，ibid, P.291「クレイステネスは彼（＝ヒッパルコス）を追放しようと欲していたので，特に彼のゆえにこの法を設けたのであった。」（このヒッパルコスはペイシストラトスの子のヒッパルコスとは異なる人物）。しかし出身都市以外に住むことは相当に危険を伴い，追放は死刑と同一視されていた（ブルクハルト 1-P.298）。
(59) プルタルコス「プルタルコス英雄伝」（上）P.37
(60) このペリクレスの子どもは，のちに将軍になったが，アルギヌーサイの海戦の責任を問われて処刑された。
(61) HDF・キトー ibid, P.101
(62) ibid, P.336
(63) F・ニーチェ「デュオニュソス的世界観」浅井真男訳，ニーチェ全集I，P.225，白水社1994年
(64) G.マレー，ibid, P.116

2. 英雄精神と身体性

(1) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第四巻，P.10，みすず書房，1991年
(2) ibid, P.10
(3) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第一巻，P.557
(4) プラトン「国家」藤沢令夫訳，P.234，プラトン全集11，岩波書店，1976年
(5) E・デュルケームー「自殺論」宮島喬訳，P.415-6，中公文庫，1989年
(6) N・エリアス/E・ダニング「スポーツと文明化－興奮の探求」大平章訳，P.204 叢書ウニベルシタス

492，法政大学出版会，1995年

(7) ibid, P.206

(8) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第四巻，P.8

(9) ヘロドトス5-71 or 5-41「歴史（中）」松平千秋訳，P.160，岩波書店，1972年：キュロンは占領に失敗して捉えられ，生命の保証を得てアクロポリスを退去したが結局処刑された。民主派勢力の要であり，これを実行したアルクマイオン家の人々は，神殿を血で穢した責任を問われ，「穢れ人」と呼ばれるようになった。

(10) クセノフォン「ソクラテスの思い出」佐々木理訳，P.53，岩波文庫，1978年

(11) トゥキディデス「歴史」小西晴雄訳，P.66，世界文学全集11，筑摩書房，1971年

(12) アリストテレス全集10「人相学」副島民雄訳，P.47，岩波書店，1988年

(13) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第三巻，新井靖一訳，P.27

(14) ibid, P.26

(15) L・クルツィウス「ギリシャ彫刻の見方」小竹澄栄・中村るい訳，P.9，みすず書房，2007年

(16) ibid, P.11

(17) ibid, P.15

(18) D・シュバニッツ「ヨーロッパ精神の源流」小杉剋次訳，P.47，世界思潮社，2006年

(19) J・ブルクハルト，ibid, 第三巻， P.25

(20) ibid, P.27

(21) L・クルツィウス，ibid, P.7

(22) J・ブルクハルト，ibid, 第三巻，P.30

(23) ibid, P.32

(24) L・クルツィウス，ibid, P.23

(25) 松島道也「ギリシャ美術」P.115，体系世界の美術5，学習研究社，1974年

(26) L・クルツィウス「ギリシャ彫刻の見方」P.26

(27) ibid, P.29

(28) ibid, P.11

(29) ibid, P.12

(30) ibid, P.13

(31) ibid, P.15

(32) ibid, P.22

(33) ibid, P.14

(34) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第三巻，P.70

(35) ibid, P.76

(36) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第三巻，P.5

(37) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第四巻，P.45

(38) ホメロス「イリアス」呉茂一・高津春繁訳，P.12，筑摩世界文学大系，1971年

(39) クイントゥス「トロイア戦記」松田治訳，P.93，講談社学術文庫，2000年

(40) ホメロス「オデュセイア」呉茂一・高津春繁訳，P.371

(41) L・クルツィウス，ibid, P.15

(42) プラトン「饗宴」鈴木照雄訳，P.92，プラトン全集5，岩波書店，1974年

(43) CM・バウラ「ギリシャ人の経験」水野一・土屋賢二訳,， P.38

(44) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第一巻，P.111

(45) ibid, P.111

(46) CM・バウラ「ギリシャ人の経験」水野一・土屋賢二訳，P.32（「ヘラクレイトス断片」孫引き）

(47) CM・バウラ，ibid, P.47
(48) アリストテレス「政治学」牛田徳子訳，P.4，西洋古典叢書，京都大学出版会，2001年
(49) ER・ドッズ「ギリシャ人と非理性」岩田晴夫・水野一訳，P.22，みすず書房，1972年
(50) ヘロドトス，ibid（中），P.69，7-104
(51) HDF・キトー，ibid, P.130
(52) ER・ドッズ，ibid, P.22
(53) F・ハイニマン「ノモスとピシュス」廣川洋一・玉井治・矢内光一訳，P.72.，みすず書房，1983年
(54) ibid, P.76
(55) 太田秀道「スパルタとアテネ」，P.23，岩波新書，1970年
(56) ホメロス「イリアス」呉茂一訳，P.261（22-305），筑摩世界文学大系2，1971年
(57) J・ホイジンガ「ホモ・ルーデンス」高橋英夫訳，P.194，中公文庫，1973年
(58) N・エリアス/E・ダニンング，ibid, P.200
(59) アリストテレス「ニコマコス倫理学（上）」高田三郎訳，P.50，岩波文庫，1976年
(60) N・エリアス/E・ダニンング「スポーツと文明化－興奮の探求」大平章訳，P.205，叢書ウニルシタス492，法政大学出版局，1995年
(61) CM・バウラ，ibid, P.36
(62) GWF・ヘーゲル「歴史哲学（中）」武市健人訳，P.134，岩波文庫
(63) WKC・ガスリー「ギリシャ人の人間観」岩田靖夫訳，P.168，白水社，2007年
(64) ibid, P.174
(65) CM・バウラ，ibid, P.298
(66) 太田秀道「スパルタとアテネ」，P.28，岩波新書，1970年
(67) JG・フレイザー「金枝篇（三）」永橋卓介訳，P.70，岩波文庫，1979年
(68) ER・ドッズ，ibid, P.22
(69) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第一巻，ibid, P.231
(70) V・オリボバ「古代のスポーツとゲーム」阿倍生雄・高橋幸一訳， P.97，ベースボールマガジン社，1986年
(71) プルタコス「プルタルコス英雄伝（上）」村上堅太郎訳，P.318，ちくま学芸文庫，1996年
(72) VM・マンフレディ「アクロポリス－友に語るアテナイの歴史」草皆伸子訳，P.267，白水社，2002年
(73) ibid, P.324
(74) プルタルコス，ibid, P.329
(75) ibid, P.324
(76) ibid, P.327
(77) P.324：同性愛や少年愛は一般に行われていた。ギリシャでは，ホモセクシュアリティは自然なことと受け取られていた。僭主ヒッパルコスを暗殺したアリゲイトンは，民主政にために暗殺に立ち上がったのではなく，同性の恋人を奪われそうになったための行為だった可能性がある。アルキビアデスに恋したソクラテスは，アルキビアデスとともに添い寝して，一夜を共にする（饗宴）。「甘き苦いエロース」と詩的に囁いたレスボス島の詩人サッポーの恋人は女性であり，このため女性同志のカップルは今日「レスビアン」と呼ばれている。さらにテーバイでは，同性愛の男子からなる「神聖体隊」が組織されていた。
(78) プラトン「饗宴」鈴木照雄訳，P.108-109，プラトン全集5，岩波書店，1974年
(79) プルタルコス，ibid, P.343
(80) トゥキディデス「歴史」小西晴夫訳，P.218，世界古典文学全集，筑摩書房，1971年
(81) VM・マンフレディ，ibid, P.271
(82) ヘルメス像とは各家庭の前に立てられていたデュオニソスの胸像と男根をかたどった角柱だった。

おそらくその男根が切り落とされた。

(83) トゥキディデス，ibid, P.240

(84) 将軍ニキアスは，シケリアに到着してもすぐにシュラークサイを攻略せずに越冬した。この間シュラークサイには援軍が到着し防衛を固めた。また撤退しようとしたとき月食がおこり，これを不吉と見て27日間兵を一カ所に留め置き，撤退の期を逸して敗北を悲劇的なものにした。

(85) トゥキディデス「歴史」7-87

(86) プルタルコス，ibid, P.367

(87) プルタルコス，ibid, P182：陶片追放はBC.417年まで続いた。ペルシャ戦争後のBC.476年に開催された第76回オリンピア祭に訪れたテミストクレスを一目みようと，幾千のギリシャ人が，このサラミス海戦の勇者を見ることに異常なまでに興奮していたというが，彼は，反対派の策略によってアテナイへの反逆罪を着せられ，最終的にはペルシャへの亡命を余儀なくされた。さらにペルシャ王からエジプトに遠征したアテナイ軍の討伐を指揮するよう命令された夜，親しい知人を呼んで別れの挨拶をし，最も英雄的な自殺法として，牡牛の血液を飲んで自害した。（ポリスを追われてペルシャに亡命した有名ギリシャ人は多い。スパルタ王デマラトス，僭主を剥奪されたヒッピアス，アルキビアデスなど）

(88) J・ブルクハルト「ギリシャ文化史」第一巻，P.322

(89) VM・マンフレデディ，ibid, P.323

(90) クセノフォン「ギリシャ史I」根本英世訳，P.30，西洋古典叢書，京都大学出版会，1998年

(91) ibid, P.298；右手とは親指のことであったらしく，兵士として槍や弓は使えないが，奴隷としての櫂を漕ぐことが可能である，という根拠だった。

(92) クセノフォン「ギリシャ史 I」2-25，P.66

(93) ibid, P.69

(94) ibid, P.70：ただしサモスを除く。

(95) 降伏の条件は，大城壁とペイライエウス（港）の防御壁を破壊し，艦船は12隻を残してすべて引き渡すこと，亡命者の帰国を許し，スパルタの友邦は友邦，敵は敵とみなすこと，陸海をとわず，スパルタの指揮に従うこと，だった。

(96) アリストテレス「アテナイの国制」川堅太郎訳，P.305，アリストテレス全集17，岩波書店

(97) プルタルコス，ibid, P.392

(98) ibid, P.393

(99) アテナイオス「食卓の賢人たち（5）」柳沼重剛訳，P.66，西洋古典叢書，京都大学出版会，2004年：アテナイオスによるとアルキビアデスには二人の遊女が付き添っていた。ティマンドラとテオドアである。このテオドアがアルキビアデスの遺体を葬ったという。

(100) FM・コンフォート「ソクラテス以前以後」山田道夫訳，P.72，岩波文庫，1995年

(101) ibid, P.71